親父が壁にめり込んでから一ヶ月が過ぎました

よっちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
親父が壁にめり込んでから一ヶ月が過ぎました

【Ｎコード】
Ｎ５４７２Ｑ

【作者名】
よっちゃん

【あらすじ】
親父が壁にめり込んでしまいました。

ですが何事もなく生活しています。

元気です。

なんでめり込んだかは不明です。

一日め（前書き）

警告：この作品には壁にめり込んだ元気なおっさんが登場します。
そういうの嫌な人は注意してください

一日め

カチャカチャ

「・・・・・・おい」

俺「・・・・・・」

モグモグ

「ちょい醤油とって」

俺「・・・・・・みそ汁うめえ」

ズズズズ・・・・

「なあ、醤油とってって」

俺「・・・・自分でとれよ」

「無茶言うなよお前・・・、見れば分かるだろ、俺、今」

親父「壁にめり込んでるし」

ーーーーーー

親父が壁にめり込んでから一ヶ月が過ぎました

ーーーーーー

俺「ごちそうさま」

親父「食った食った、ゲフッ」

俺「ズズ、あー、茶がうめー」

親父「・・・お父さんもお茶がほしーなー」

俺「あー茶がうめー」

親父「・・・あれー、なんだかお父さん喉かわいちゃったなー。でも動けないしなー、壁にめり込んじゃって動けないしなー」

俺「うめぇー」

親父「おっかしーなーどこで育て方間違えたのかなー」

俺「ズズズズ・・・」

親父「・・・・・」

俺「泣くなよ・・・。ほれお茶」

親父「うめー」

＊　＊　＊

一息ついた。

俺「ふー」

親父「茶うめー」

俺「・・・あのよう、もう何度も聞いたけどさ」

親父「なんだ、我が子よ」

俺「なんで壁に埋まったの？」

親父「埋まってない、めり込んだんだ」

俺「別にどっちでも良いけど・・・なんでめり込んだの」

親父「お前には言えん」

俺「何でだよ」

親父「お前が知るには、まだあまりにも若すぎる・・・」

俺「なんか意味深な感じにしてんじゃねーよ」

親父「お父さん、壁で食っていこうと思うんだ・・・」

俺「別に職業じゃねーよ壁は」

親父「生理で・・・」

俺「殺すぞ。もういいよ、どうせ言う気ないだろ」

親父「うん」

俺「コイツ・・・」

親父「茶ァうめー」

＊　＊　＊

ＴＶ＜アイタカッターアイタカッターアイタカッター♪

親父「イェス！！」

俺「・・・なあ、親父。一つ聞きたいんだけど」

親父「何だ、今良い所なんだけど」

俺「トイレどうしてんの」

親父「・・・・・・・・」

俺「・・・」

親父「・・・・・・イェス！！」

俺「イェスじゃねーよ、壁の中汚物まみれじゃねえだろうな」

親父「そんな訳ないだろ」

俺「じゃあどうしてんだよ」

親父「専門の業者の人に任してる」

俺「何の業者だよ、そんな業界ねーよ」

親父「世の中は、広いぞ・・・」

俺「あんのかよマジで」

親父「そろそろ寝るか」

俺「ないだろそれ、おいって」

親父「おやすみ」

俺「おいって」

一日め（後書き）

感想とか要望とか暴言とか「あなた、本当はウチの子じゃないの・・・」とかありましたらお便りください。

あとお題もください。

一日め、よる

ーーー深夜

・・・zzz

俺「・・・んん」

俺「3時か・・・」

俺「うートイレトイレ・・・」

ガチャガチャ

俺「開かない・・・？」

俺「誰だ・・・？おーい」

ドンドン

親父「入ってるぞー」

俺「なんだ親父か・・・ふぁ、ねむ・・・」

俺「・・・・・」

俺「・・・・・・・・!!?」

俺「おいコラ親父!!親父いたろ今!!」

ドンドン!!ガチャ!

俺「誰もいねえ・・・」

俺「じゃあ居間の壁は!?」

ダッダッダッダッ

カチリ（電気つけた）

親父「んがっ!んだよまぶしいなー!」

俺「・・・え?ええ?」

親父「3時じゃねーか、何だよ、ったく」

俺「お前今トイレにいただろ!!」

親父「んなワケねーだろ」

俺「いや返事しただろお前!絶対いたって!!」

親父「いねーって、壁にめり込んでんだぞ俺は。いねーって」

俺「いや・・・ええー・・・」

親父「寝ボケたんだろ、まったくしょうがねーなー。もういいから寝ろよ」

俺「釈然としねぇ・・・。まあいいや、寝る」

親父「マジ焦ったー」

一日め、よる（後書き）

感想とか要望とか暴言とか「あなた、本当はウチの子じゃないの・・・」とかありましたらお便りください。

あとお題もください。

サブタイ募集中

ーーー朝

俺「じゃあ、学校行ってくるから」

親父「おー、気をつけてな」

俺「昼メシ、レンジにあるからチンして食えよ」

親父「できないよ、お父さん動けないからチンできないよ」

俺「いってきまーす」

親父「いってらっしゃーい」

親父「・・・・暇だな」

＊　＊　＊

学校

俺「おはよう」

友「よう、遅かったな」

俺「親父のメシ作ってたからな」

友「親父さん、まだめり込んでんの？」

俺「もうああいうオブジェだと思う事にしたよ」

友「お前も大変だな」

女「なになになんの話ー？」

友「こいつの親父の話」

女「へーえ、お父さん何してる人なの？」

俺「オブジェ」

女「えっ」

女「あっああ、芸術家の人？オブジェ作ってるんだ、すごーい」

俺「いや、壁にめり込んでる」

女「えっ」

女「なにそれ見てえ」

＊　＊　＊

放課後、自宅ーーーー

俺「そういう訳で、連れてきたから」

親父「お父さんでーす」

女「すっげ！なにこれすっげ！！何で！？何でめりこんでんのこれ！すっげ！」

親父「良いねー、実に良い反応だねー。若い子っていいねー」

女「すげー喋った！！」

親父「そりゃあ喋るよ、人間だよ。いやーでも良いねー若い子いいねー」

俺「うるせーエロ親父」

女「ねえねえひっぱって良い？思いきりひっぱってみて良い！？」

俺「いいよ」

親父「いいよって流石にそれはよくなイデデデ痛い痛い。痛いって、外れる！何かが外れる！！」

女「ねえねえちょっと口の中手入れてみていい？」

俺「いいよ」

親父「よくないよ。お父さん別に観光名所じゃないよ。嘘つきの手が抜けなくなるあのあれじゃモガガガガガ」

女「わーすっげー！ベトベトするー！！」

俺「そろそろ抜かないと窒息するぞ」

女「わかったー」

親父「こえー！、今の子こえー！恐れをしらねえー！」

＊　＊　＊

その後ーーー

女は帰りました

親父「ひどい目にあった」

俺「良かったな、楽しんで貰えて」

親父「よくねえよ。もうお父さん色んな事されちゃったよ。汚され

ちゃったよ」

俺「個人的には、お父さん当てゲームが面白かったかな」

親父「あの俺の顔に的描いて玉投げる奴ね。イジメじゃね？あれイジメだよね」

俺「まあまあ、女の子の考える事だから・・・」

親父「考案したのお前だよね。的書いたのお前だよね」

俺「さてそろそろメシにするかー」

親父「顔の奴消してからにしない？」

サブタイ募集中（後書き）

感想とか要望とか暴言とか「あなた、本当はウチの子じゃないの・・・」とかありましたらお便りください。

やっぱお題ください。

業者に頼めば大体なんとかなる

食卓ーーー

ガツガツモグモグモグモフモフ

親父「ハムカツうめぇー、あ、ちょいソース取って」

俺「・・・親父、ちょっといいか？」

親父「ん、なんだ。モグモグ」

俺「明日、学校で三者面談があるんだけど」

親父「もぐ、へえー」

俺「来ないよな。つうか来れないよな？」

親父「いや普通に行くけど」

俺「来るのかよ。壁に埋まってんだぞお前」

親父「もぐ。・・・ふう、お前もまだ若いな」

俺「ほっぺに米粒つけてる奴に言われたくねーよ。で、大丈夫なのか」

親父「そんなもんお前、業者の人に頼めば一発だよ」

俺「また業者かよ、だからそんな業界ねえよ」

親父「まあお父さんに任せておけって、そんなことよりだ」

俺「何だよ」

親父「そろそろソースとってくれない？」

俺「・・・」

俺「やだ」

親父「ひどい」

＊　＊　＊

ーーー当日、学校

俺（本当に来るのかよアイツ）

先生「お父さんは普段何をしている人なの？」

俺「基本的に壁に埋まってますね」

先生「へー、壁に。良いお父さんじゃない。大切にしないとだめよ？」

俺（この先生もよくわかんねー人だよな）

「チワーッス！お届けにまいりましたー！」

俺「ん、誰だ？」

ガラガラガラガラ

親父「おーう、待たせたな、あ。先生どうもこんばんは」

先生「こんばんはー」

俺「壁ごと持ってきやがった！！おまっ、くり抜いたのか、家の壁くりぬいたのか！」

親父「ああ、この業者の人が全部やってくれたよ。すごい手際よかった」

俺「マジかよ」

業者「チワーッス！じゃっ自分はこれで、ありがとうございましたー！」

俺「おい待てお前。何の業者だ、お前何の業者だ！おいって！」

業者「チワーッス！またのご利用をお待ちしておりやすー！」

シュダッ

俺「速っ。もう見えなくなった・・・。何者だよあいつ」

先生「へーえ、ガッシリしてて立派なお父さんですねぇー」

俺「順応速すぎだろ先生。戸惑えよ。もう少し戸惑えよ」

親父「いやー、昔は野球に打ち込んでたものでー」

俺「ちげーよ。ガッシリしてんのは壁だよ。ほとんどコンクリだからだよ」

先生「肩幅とか2メートルはありますもんねー」

俺「聞けよ」

＊　＊　＊

懇談終わり

親父「いやー先生、今日は楽しかったですよ」

先生「お父さんもお話上手で～、あっ、さっき言ってたビデオ。今度お渡ししますね」

俺「ほとんどお前らが雑談してただけだったな」

先生「それでは私はこれで。さようならー」

俺「はいはい、さようならー。」

親父「はっはっは。良い先生だったじゃないか。美人だし」

俺「うるせえ、鼻の下伸ばしやがって」

親父「はっはっは」

俺「ところでお前。どうやって帰るんだよ。俺は運ばねえぞ」

親父「ああ、もう呼んである」

俺「は？」

業者「チワーッス！お迎えに参りましたー！」

俺「またお前か！」

業者に頼めば大体なんとかなる（後書き）

感想お待ちしている者です。

息子が口を聞いてくれないでござるの巻

親父「ズズ・・・・茶うめ」

俺「・・・」ペラ

親父「せんべいもうめぇ」

ボリボリ

親父「・・・茶とせんべいというのは分かち難い関係にあるな。茶、無くしてせんべいは無く。せんべい無くして茶は無い」

俺「・・・」←マンガ読んでる

親父「そう、例えばハンバーガーとコーラ。あれも2つで一つ。そう例えば投手と捕手。ぐりとぐら。林家ペーとパー子。セーラー服と機関銃」

俺「・・・後半ジジくせえな」

親父「・・・ズズ」

俺「・・・・」ペラ

親父「・・・・」

親父「・・・なあなあ我が子」

俺「・・・・」

親父「カレーライスとハヤシライスって似てるけど全然味違うよな」

俺「・・・・」

親父「だいたいハヤシライスのハヤシって何だよって思うよな」

俺「・・・・」ペラ

親父「お父さん考えたんだよ。あれはな、「ハヤシ」と「ライス」で分けるからいけないんだよ」

俺「・・・」

親父「カレーライスは「カレー」と「ライス」を合わせたものだろ？」

俺「・・・」

親父「ハヤシライスはな、「ハヤシ」と「ライス」を合わせたものじゃないんだよ。なんでか聞きたい？ねえ聞きたい？」

俺「・・・」ペラ

親父「実はハヤシライスは「ハヤシライ」という原料で作った「酢」なんだよ。つまり」

俺「・・・」

親父「ハヤシライ酢」

俺「・・・」

親父「ハヤシライ酢をご飯にぶっかければ「ハヤシライス」のできあがり！」

俺「・・・・」

親父「・・・・おとうさんびっくり」

俺「・・・・」ペラ

親父「・・・・ズズ」

俺「・・・・」

親父「・・・・」

俺「・・・・」

親父「・・・・なあなあ我が子」

俺「・・・・」

親父「・・・しりとりしない？」

俺「・・・・」

親父「しりとりの、「り」からね。りんご」

俺「・・・・」

俺「・・・ごはん」

親父「・・・・」

親父「・・・んちゃ砲」

俺「ウラン」

親父「・・・・」

俺「・・・・」ペラ

親父「・・・ンドゥバ」

俺「バリカン」

親父「・・・・」

俺「・・・・」

親父「・・・ごめんもうない」

俺「・・・・」ペラ

親父「・・・・ズズ」

俺「・・・・」

親父「・・・・」

俺「・・・読み終わった」パタン

親父「・・・ズズ」

俺「・・・・」

親父「・・・貸して」

息子が口を聞いてくれないでござるの巻（後書き）

6回チェンジしたらヤクザが来たでござるの巻

息子がみそ汁しか食わしてくれないでござるの巻

休日．朝ーーー

チュンカチュンカチュンカ

俺「ん・・・。朝か・・・。ふぁーあ」

スタスタスタ

俺「・・・おい、親父。朝だぞ」

親父「んががー、ぐごー」

俺「しかしこんな状態でよく熟睡できるな。」

親父「んごおー。ずぴー」

俺「起きろよ。今日は誰か来るんだろ」

ゴチーンゴチーン　<ーチョップしてる音

親父「んご・・・」

親父「んふふ・・・人違いですよ、アントニオ・バンデラスじゃな

いですよ・・・」

俺「図々しい夢見てんじゃねーよ」

ゴスッ

親父「んがっ！」

親父「人の心に闇ある限り、私はまた蘇るぞ！！鈴木いいいいいいいいいい！！！」

親父「なんだ夢か」

俺「どんな夢だよ」

＊　＊　＊

朝食

親父「ズズ。あーみそ汁うめぇー。お父さんはもう、朝メシにみそ汁を飲む事以上の幸福はいらんね。これ以上はバチが当たるよ」

俺「それは楽でいいわ。これから三食みそ汁な」

親父「欲を言えば子供にもっと愛されたいかな」

俺「ところで、今日お客さんが来るって行ってなかったか」

親父「あー、ちょっとした事情で。今日一日だけ親戚の子供を預かる事になったんだよ。」

俺「ふーん。どんな子」

親父「物静かな大人しい子だったよ。前に会ったときは」

俺「へえ、何時ぐらいに来るの」

親父「実はもう来てる。お前の後ろ見てみろ」

少女「・・・」

俺「うおお！び、びっくりした」

親父「こんにちはー、久しぶりだねー」

少女「・・・」コクン

俺「あ、ああごめんね。びっくりして。初めまして。今日一日よろしく」

少女「よくもここまで来たものだ。
貴様等は私の全てを奪ってしまった。
これは許されざる反逆行為といえよう。
この最終鬼畜兵器をもって貴様等の罪に私自らが処罰を与える。
死ぬがよい。」

俺「　　」

親父「はいはいよろしくねえ」

俺「いやいやいやいや」

俺（おいコラどういう事だ。あれは何処の大佐だ。何か聞いた事あるぞあのセリフ）ヒソヒソ

親父（いやー挨拶だろ多分、昔は大人しく物静かな子だったんだけどね）ヒソヒソ

俺（本当かよお前）

親父（きっと照れ隠しか何かだろーかわいいなー。あっはっはっは）

俺（めっちゃ睨んでんですけど、目がマジなんですけど。）

親父「そうだ！今日は動物園に行く約束だったなあ。でもおじさん壁に埋まっちゃっててて身動き取れないから。このお兄さんと一緒に行ってきなさい」

少女「構わぬ。」

俺（オイコラ聞いてねえぞ。何言ってんだお前。お前何言ってんだ）ヒソヒソ

親父「こっちのお兄ちゃんも昨日から動物園楽しみで眠れなかったんだって」

少女「救えぬガキだ」

俺（親父てめえええええええ！）

＊　＊　＊

動物園

俺（結局来ちまった・・・。畜生あの親父・・・）

チラ

俺（無言でガンガン歩いて行くなあの子。何か見たい動物があるのか？）

少女「ぬ・・・」ピタ

俺（あ、キリンの前で止まった。）

少女「・・・」

俺「え、えーっと。キリンさんが好きなの？」

少女「ニヤァーーーー」

俺（うわーすげー笑ってるよ。怖っ）

少女「奴をどう料理するか考えていた」

俺「あ、そうスか・・・」

少女「奴の長い首は長所であり短所だ・・・。巨体はまず末端から攻める・・・。

まずは足を払い体勢を崩し、頭が下がった所で首に組み付き関節を極める」

ここから先は純粋な力の勝負だ・・・。

奴の首がくびり切れるのが先か・・・。己が首ごと振り回され叩きつけられるか・・・」

俺（キリンさん見ながらそんな事考えてたのかよこの子。どこの最強生物だよ）

少女「ククク、勝敗は明らかだがな・・・。ぬ、あれは・・・」

スタスタスタ

俺「あっ、どこに」

俺（乗馬コーナー？）

少女「・・・」じーっ

俺「・・・馬、乗りたいの？」

少女「いらぬ！！おれが体をあずけるのは黒王号のみ！」

俺「世紀末覇者かよ」

＊　＊　＊

パカッ。パカッ

少女「・・・・・」↑馬乗ってる

馬「ヒヒンヒヒン」

俺「結局乗りたかったのな」↑なんか扱いに慣れた

少女「・・・食えぬ男よ」

馬「ヒヒィン」

少女「フン、中々良い馬だ。いいだろう。この拳王の物になるか？」

俺「ノリノリだな・・・。でもそれ動物園のだから。公共の物だから」

少女「従順か死を選べ！！」バッシィ！

馬「ブルッッヒヒィィー！！！」

俺「うわっ馬鹿！暴れさせるな！！」

パカラッパカラッ！！

少女「フハハハ！心地よい乗り心地だ！」

俺「降りろって！あぶないから降りろって！！」

少女「この拳王、馬などは屈さぬ！！」

俺「そういうのいいから！！なんか人集まってきたから！」

少女「愚民ども頭が高い！ひかえいひかえい！我こそ天下なり！」

俺「もう黙れお前！」

＊　＊　＊

その後

俺「・・・・・・」

少女「・・・・グス」

俺「・・・飼育員の人にすげー怒られちゃったじゃねーか」

少女「グス・・・フン、どこまでも下衆なやつらよ」

俺「・・・ハンカチやるから目と鼻をふけ」

少女「・・・・」グシグシ

俺「まったく・・・ケガが無かったから良かったようなものの」

少女「・・・・」

俺「すっかり夕方になっちまったな。そろそろ帰るか」（ほとんど怒られてただけだったな）

少女「・・・・ぬ」

俺「ん・・・？出口に誰かいるな、迎えにきたのか。母ちゃんか？」

少女「・・・・」コクリ

少女母「あらあら、どうもこんにちは～」

俺「こんにちは」

俺（母ちゃんは普通っぽいな）

少女母「今日はごめんなさいねぇ、ちょっと主人と地方の武闘会に出場しててねぇ」

俺（普通じゃなかった）

少女母「ほら、お兄ちゃんに今日一日ありがとうございましたーってお礼は？」

少女「・・・・ふん」

少女母「ほらちゃんと言わないと」

少女「・・・この拳を土産にもっていくがいい！」

ゴスッ

俺「うぼっ・・・」

少女「・・・さらばだ！」

ダダダダ

俺「・・・あ、あの野郎」

少女母「あらあら！ごめんなさいねぇ、ちょっと愛情表現が苦手な子で」

俺「そういう問題です、か・・・」

少女母「でもきっと気に入られてるわよあなた。自分の認めた猛者以外は殴らないようにって、私教えてるもの」

俺「・・・なにその教育方針」

＊　＊　＊

夜ーー

自宅・夕飯

親父「おつかれさん」

俺「ひでえ目にあった」

親父「はっはっは！あの年頃の子供は多感だからなあ！」

俺「・・・」

親父「ところで」

俺「何だ」

親父「お父さんの食卓にみそ汁しかないんだけど」

俺「お前今日から一週間みそ汁だから」

息子がみそ汁しか食わしてくれないでござるの巻（後書き）

サブタイが迷走しているでござるの巻

母ちゃんが物理的に強いでござるの巻__前

俺「ズズズズ・・・。茶うめー」

親父「・・・」

俺「ボリボリ・・・。せんべいもうめー」

親父「・・・」

俺「・・・」

俺「なんだよ、今日はやけに静かじゃねえか」

親父「・・・ああ」

俺「何だよ。調子狂うな」

親父「・・・ちょっと今日は息子に、大事なお知らせがあります」

俺「ん・・・なに？」

親父「・・・」

俺「なんだよ」

親父「本日、母ちゃんが帰ってきます」

俺「え」

俺「マジで」

親父「マジで」

＊　＊　＊

俺「へえ、母ちゃんかあ。最後に会ったのはガキの頃だったっけ」

俺「で、今日帰るって連絡があったのか？」

親父「いや・・・」

親父「ある筋からの情報だ・・・、ついさっき母ちゃんが日本上陸したとの情報が入った・・・」

俺「どの筋だよ。そいつに母ちゃん監視されてんのかよ」

親父「目的はおそらくここ・・・。自宅への帰還が予想される・・・」

俺「そりゃ、まあ帰ってくるだろ・・・」

親父「空港から自宅までの距離、数十キロはくだらないが。母ちゃんの走行速度を考えると恐らくもうすぐ到着する」

俺「え、母ちゃん走ってくるのかよ。嘘だろオイ」

親父「うむ。では後ろを見てみろ」

俺「え？」

母「二人とも、久しぶりね・・・」

俺「うおお・・びっくりした、またこのパターンかよ」

親父「おかえり母ちゃん」

俺「おお・・・おかえりなさい」

親父「はっはっは、見てのとおり壁にめり込んでるけど元気でやってるよ」

母「貴方がめり込んでるの見るのも久しぶりね・・・」

俺「前もめり込んだ事があるのかよ」

母「そういえば、あんたはまだ生まれてなかったわね・・・」

親父「はっはっは、新婚の時はなんだか緊張して良くめり込んだモンだ」

俺「お前どういう体してんの」

母「あの頃はお互い若かったわね」

俺「何なの。若いとそうなんの」

親父「まあお前もその内わかるよ」

俺「いやだな・・・」

母「それよりお母さんノドかわいたわ。息子。茶出して茶」

俺「久しぶりに会ったてのに感動薄いなオイ。子供こき使いやがって」

母「久しぶりに会った母親に親孝行もしないつもりなのかしら。酷い息子を持ったわ」

俺「やれば良いんだろやれば・・・」

親父「はっはっは。母は強しだな」

俺「ほれお茶」コト

母「ご苦労様・・・ズズ」

俺「そういえばよ、母ちゃんは何の仕事してるんだ?海外にいるらしい事は知ってたけど」

母「あなた・・・。説明してなかったの・・・?」

親父「いやあ・・・、なかなか言いづらくて」

俺「親父に聞いても言わないしな。何やってたんだよ海外で」

母「傭兵よ」

俺「マジかよ」

母「最近の仕事は中東で民兵の訓練教官とか、義勇兵とかにも参加してたわ」

俺「ええ・・・何やってんのあんた・・・」

母「あの辺の情勢は不安定だから火種も絶える事がないし。おかげで私達家族も食いっぱぐれる事がないわね」

俺「それはそれで何かすげー複雑な気持ちだわ・・・」

親父「はっはっは。母は強しだな」

俺「強すぎるだろ」

母ちゃんが物理的に強いでござるの巻__前（後書き）

もうハットリくん風サブタイトル定着させて良いのでござるかの巻

母ちゃんが物理的に強いでござるの巻―後

俺「だいたいなんで傭兵なんだよ。他にもっと何かあるだろ」

母「火薬と硝煙の臭いが私を呼んでいるのよ」

俺「マンガでしか聞いた事ねーよそんなセリフ」

父「はっはっは、こう見えて母ちゃんは超が付く程のドジっ子だからな。家事もパートもドジり過ぎてもマトモにできないんだよ」

俺「マジかよ。なんだよその余計な萌え属性」

父「ただ戦闘技術は超一流なんだけどな」

俺「何でだよ。怖えよ」

父「母ちゃんがＯＬやってた時はお茶もマトモに入れられなくて何十回もズッコケて社長に熱々のお茶ぶっかけてたもんだ」

母「半分くらいわざとだったけどね」

俺「それでさっき俺に入れさせたんだ」

父「そんな訳で母ちゃんは傭兵以外に仕事が見つからなかったんだよ」

俺「ええー・・・」

母「ズズ・・・ところであんた達、頭下げた方がいいわよ」

俺「は？」

ズダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダ！！！バリバリバリバリ！ダダダダダ！！

俺「うおおおおおおおおおおおおおおおおなになになんだあああ！！！」

母「恐らく母さんがこの前解体に追いやった武装集団の残党ね」

俺「ええー、ものすげー撃ってきてるんだけど、どうすんだよオイ。ここ日本だぞオイ」

母「どうやらここまでついてきてたみたいね。母さんドジっちゃった。てへ」

俺「てへじゃねーよ。全然笑えないよ」

母「いちいち殺りに来るなんて女々しい連中だわ・・・ズズ」

俺「なんでくつろいでんの。茶飲んでんじゃねーよなんとかしてくれよ」

母「時間外労働とかめんどくさいわね・・・」

俺「ピンチだから！家庭のピンチだから母ちゃん！」

親父「湯のみがあああ！！お父さんの湯のみわれたあああああ！！！」

俺「それどころじゃねーだろクソ親父！！」

母「ちょっとシメてくるわ」

俺「あの湯のみそんな大事だったのかよ」

母「じゃあちょっと行ってくるから。あんた達は隠れてなさい」

ガラガラ

俺「行っちゃったよ」

親父「湯のみが・・・」

俺「まだ言ってんのかよ。少しは母ちゃんの心配しろよ」

親父「大丈夫だ・・・母さんは強い人だから・・」

俺「お前本当しょうもないな・・・」

＊　＊　＊

俺「・・・」

父「・・・・・」

＜アイタカッタゼェエクソアマガァァァ　　↑家の外の音

＜アンタダレダッケ

俺「・・・・・・」

父「ズズ・・・・」

＜コレデオワリダクソヤロー！

ズダダダダダ　ヒュンッ

＜ナッ？キッ、ヤツガキエタッ！？

俺「・・・・・・」

父「ボリボリ」

＜ヒッサツオカアサンチョップ

メコッ

＜アヒッ

父「多分もう片付いたから様子見に行ってきて」

俺「外で凄い事起こってるのに描写をなあなあにしている気がする・・・」

父「気のせいだよ。全然気のせいだよ」

俺「様子見てくるか・・・」

スタスタ、ガラガラガラ

俺「おお・・・本当に退治してる・・・」

母「良い所に来たわね息子よ。この馬鹿を警察に突き出しといてちょうだい」

俺「分かった。って母ちゃんはどうすんだよ」

母「母さんはこのまま戦場に帰るとするわ。変なのもついてきちゃった事だし。なんかシラケたわ」

俺「勝手だな・・・、またこんな奴がウチ来たらどうすんだよ」

母「そうならないように根絶やしにしてくるわよ。じゃあね」

スタスタスタ

俺「なにそれ怖い」

ピタ

母「そうそう息子」

俺「は？」

母「メリークリスマス」

スタスタスタスタ

俺「母ちゃん・・・」

俺「今2月なんだけど・・・」

母ちゃんが物理的に強いでござるの巻__後（後書き）

時差ボケでござる

親父が能力に目覚めてから小半時が過ぎました

夕飯

カチャカチャ

モグモグ

親父「・・・」

俺「もぐもぐ」

親父「・・・・・」

俺「もぐ。なんだよ、メシ食わないのか」

親父「・・・息子よ。ちょっと話があるんだ」

俺「え、何」

親父「・・・お父さんな」

俺「うん」

親父「「能力」に目覚めてしまったのかもしれない」

俺「・・・・・」

親父「・・・・・・」

俺「・・・・・・」

親父「・・・・」

俺「もぐもぐ・・・・」

親父「いやあの、マジで」

俺「・・・・・お前多分俺のマンガ勝手に読んで影響受けたんだろ」

親父「マンガではない！「聖書」あるいは「アーカイブ」と呼べ！」

俺「ああ、そう・・・・」

親父「そうだ」

俺「そんで・・・？何の能力に目覚めたんだよ」

親父「それはな！」

俺「おう」

親父「それはな・・・・」

俺「・・・・・」

親父「・・・」

俺「いや考えとけよ・・・」

親父「あっ、あのー、お茶とおせんべいを通常の3倍おいしく食べる能力に目覚めたんだよ」

俺「地味に嬉しい能力だけど別に本人以外には糞の役にも立たんな・・・」

親父「あと洗濯物が2倍乾きやすくなる能力にも目覚めた。あの、ハンガーを折って中に空気を入りやすくするあの」

俺「もうそれただの生活の知恵だろ。能力じゃなくて小技だろ」

親父「とにかくお父さんはこの能力で「組織」に立ち向かうんだよ!!」

俺「何の組織だよ、無理だよ。せんべい食ってハンガー折りながら立ち向かうのかよ」

親父「もう3人の仲間も見つかったしな。ちょっと後ろを見てみろ」

俺「またか・・・」

クルリ

男「・・・・・」

外人「Hi」

業者「チャーッス」

俺「いや一人業者が混じってるだろ。だからこいつ何処の業界だよ」

親父「前から順に吉田。ハンクス。業者さんだ」

俺「いや業者は知ってるけども。手広くやってやがんなこいつ」

吉田「よろしく・・・」

外人「よろしくデース」

業者「チャーッス」

俺「帰ってくれねえかな」

親父「早速能力の紹介と行こうか。ん？もう待ちきれないだろ？ん？」

俺「帰ってくれねえかな」

親父「まず吉田だ。彼はつい先日、ある「能力」に目覚めた」

吉田「はい・・・」

俺「イヤならイヤって言って良いんだぞ吉田」

親父「吉田くん。見せてやりなさい」

吉田「はい・・・」

ガサガサ

俺「ポテトチップス取り出して何するんだ。ポテチ3倍うまく食べる能力か？」

親父「いやポテチを2袋一気に食べる能力だ」

俺「ひどく健康に悪い能力だな」

吉田「いきます・・・」

バサッ

俺「無理すんな。吉田無理すんな」

吉田「モガッ！！モガガモグシャムガッ！！」

バリバリバリ

俺「無理すんなって。誰も何の得もしねえから無理すんなって」

吉田「モガムグムチャウェホッ！！ゲホッ！！エホッ！！！」

俺「もういいって。お前の体悪くしてポテチが無駄になるだけだって」

バサッ（2袋目）

吉田「バリムグモガガッ！むぎごがががっ！！ガガッ！いっ！んっ！」

俺「やべっ喉つまらせた。ちょっ誰か救急車呼べ！」

ピーポーピーポー

業者「チャーッス！呼んどきましたー！」

俺「相変わらず手際良いな」

＊　＊　＊

吉田はタンカで運ばれました

俺「無茶しやがって」

親父「まだ能力を使いこなせてないようだな」

俺「能力じゃねーよ。宴会芸にしてもタチの悪い部類の奴だったよ」

親父「さて次はハンクスですが」

俺「これまだ続けんのかよ」

外人「オー、ヨシダのムネンは私がハラシマース」

俺「いいよ別に」

親父「はい。なんとこのハンクスはな」

俺「うん」

親父「英語が話せます」

俺「・・・・・・」

親父「・・・・・・」

俺「いや・・・。まあ、そうだろうね」

親父「・・・え？すごくね？もっと驚けよ」

俺「いや外人だろこいつ」

親父「んな訳ないだろ。日本語喋ってるじゃん。日本人だよ」

外人「オー、ココロモチ喉がしなびてキマシタ。ソチャ！ソチャだしてクダサーイ。しばしばソチャをくゆらしタイデース」

俺「むしろちょっと込み入った日本語使おうとしてる所の方が凄いだろ。使い方間違ってるけど」

親父「彼にはウチのパーティの参謀を務めてもらう」

俺「ああ、そう・・・」

親父「で、最後にこの業者さんだ」

業者「チャーッス」

俺「お前いくら貰ったの？いくらでこんな事してんの？なあ」

親父「残念ながら彼はまだ能力には目覚めていないが、これからの成長を見越して我がパーティに入れる事にした」

俺「ていうか雇ったんだろ」

親父「ちなみに外人と吉田の住所を調べてコンタクトを取り、今日ここに集めたのはこの業者さんだ」

業者「チャーッス」

俺「もうこいつリーダーやれよ。一番有能だろ」

親父「そういう訳で！！今からこの４人パーティで「組織」に殴り込みをかけに行く！」

俺「吉田は病院だろ」

親父「業者さん！「組織」のアジトの場所は！」

業者「チャーッス！調べときました、最短のルートも割り出しときましたー」

親父「よし！運んでくれ！行くぞ！外人！」

外人「ヤー！ヒアウィゴー！」

俺「外人つってんじゃん。やっぱ気付いてたんじゃん」

業者「チャーッス！！じゃあちょっと失礼しますー！」

メコッ！

俺「親父ごと壁抜いてるこの光景ももう慣れたな」

親父「ではお父さんは行ってくる！奴らを成敗しにな！」

外人「ヤー！ジャパニーズサムラーイ！クロフネシュウラーイ！」

業者「じゃあこれで失礼しやすー！ありがとやんしたー！」

ブロロロロロ・・・・↑トラック

俺「マンガ読もう」

親父が能力に目覚めてから小半時が過ぎました（後書き）

チョコボール2箱なら一気にいけそうな気がする

壁のお父さん国際総合保守調査交流振興研究所有権なんとか団体

学校

ガヤガヤガヤ

俺「・・・ああ、ねみい」

ワイワイガヤガヤ　ギャーギャー

友「おっすー元気か」

俺「あんまりだな、なんか最近色々あって疲れた」

友「親父さんのことか？」

ガヤガヤガヤ　ギャーギャー　ウォー

俺「それもあるが何かウチに変な奴が良く集まるようになってな」

友「なんか大変だなお前も」

ウォォーウォォー　ギャーー　ダーイ！インペリアルダーイ！

俺「そのせいか学校に居ると落ち着くわ」

友「はは」

女「やーおはよー」

俺「おうおはよう」

友「おはよー」

女「ねえねえ今日家にお邪魔していい？」

俺「・・・別にいいけど。何で？」

女「実はね、貴方のお父さんの保護団体を作ったの！」

俺「学校にも変な奴いたよ」

女「名付けて壁お父さん国際総合保守調査交流振興研究所有権保護団体」

俺「なげえよ」

女「略してＮＨＫ！」

俺「何の略だよ」

女「ＮＨＫ（なんぱっとけない）（かわいいお父さん）」

俺「やっぱお前ウチ来るなよ」

友「別にどこも略してないよな」

女「まだ私一人しかいない団体だけど、これからどんどん信者を増やしていくの！」

俺「全力で阻止するわ」

友「信者ってお前」

女「そんな訳でまずは二人、貴方のお父さんに興味ある子をピックアップしてきたわ！」

女2「よろしくー」

女3「よろしく・・・」

友「モテモテだな親父さん」

俺「俺としては軽く嫌がらせだな」

女2「なんか面白いもの見れるって言うからついて行くことにしたんだー」

友「あははそうなんだー」

俺「俺は全然面白くないけどな」

女3「壁にめり込んだと聞いていても立ってもいられなくなったわ・・・。そうよ、この時を待っていたの・・・半端なめり込み方だったら容赦しないわ」

友「あははそうなんだー」

俺「なんかこの人怖いんだけど」

女「ゆくゆくは彼女達にも壁お父さん総合保守経済・・・。えー、ＮＨＫに入ってもらうつもり！」

俺「自分でも団体名うろ覚えなのな」

友「長いしな」

女「そしてこのＮＨＫによって壁お父さんの更なる発展、成長、標準化、構造化、
体系化、電子化。産業革命、高度経済成長、墾田永年私財法、大正デモクラシー、そしてゆくゆくは世界進出！」

俺「別にしなくていいからそっとしておいてくれ」

友「歴史の授業みたいだな」

女「まずは全国の壁にめり込んだお父さんの保護から始めるわ！」

俺「そうかがんばれ」

友「多分そんなにいないぞ」

俺「ていうかいねえよ」

女「映画化、アニメ化、グッズ化計画も予定中なの」

俺「そうか。予定のままになるといいな」

女「主演は高倉健、タイトルは「壁親父」。幼い一人娘を亡くした

日も、愛する妻を亡くした日も、彼はずっと壁にめり込み続けてきた・・・」

俺「どっかで聞いた話だな」

友「たぶん「鉄道員(ぽっぽや)」だろ」

俺「高倉健が壁にめり込んでる絵ってシュールだな」

友「それはちょっと見てみたいわ」

女「そんな訳でまずは家にお邪魔してお父さんの保護よ！」

俺「いいけど今親父家にいないぞ」

女「えっ」

女「なんで？」

俺「業者に持っていかれた」

女「えっ」

俺「組織を倒しに行くんだって」

女「えっ」

女「なにそれ面白そう」

俺「見つけたら好きにしていいよ」

女「よし！私たちも行くわよ！」

女2「えっでもまだ授業」

女3「面白いじゃない・・・やってやるわ・・・！！」

女2「えー、何この情熱」

女「そういう訳で行ってくるわ！！」

俺「ああ、うん」

ズダダダダダ・・・・・

友「行ったな」

俺「ああ」

友「疲れたな」

俺「ああ」

俺「全員帰ってこなければいいのに」

壁のお父さん国際総合保守調査交流振興研究所有権なんとか団体（後書き）

次回全員帰ってくるでござるの巻

受信料シカトし続けたら怖い人が来たでござるの巻

ガラガラガラ

俺「ただいまー」

俺「そういや親父いないっけか」

親父「・・・・おかえり」

俺「何だ帰ってきてたのか」

親父「・・・ああ」

俺「・・・・・・」

親父「・・・・・・」

俺「・・・で？」

親父「・・・・」

俺「組織が何たら言ってたけど何処行ってたんだよ」

親父「今は、話したくないんだ・・・」

俺「ああそう」

親父「俺があの時・・・。吉田・・・すまん・・・！」

俺「え、何。吉田何があったの」

親父「気にするな」

俺「・・・まあどうでもいいけど」

親父「テレビつけてくれ。そろそろおじゃる丸の再放送やるから」

俺「いい年こいた大人がそんなん見るなよ」カチ

親父「おじゃる丸おもしろいじゃん。あっ、おもしろいでおじゃ」

俺「言い直すなムカつく」

ピンポーン

俺「はーい」

「すいませーんＮＨＫの者ですー。ドア開けてくださーい」

俺「あーウチテレビないんですよー」

ＴＶ＜おじゃじゃー！マロのプリンでおじゃー！

「本当ですかー、良い年した大人が見るものじゃない感じの音が聞こえますよー」

俺「気のせいですよー」

＞キークンヒヨコじゃナイッピー！

「本当ですかー、大人になり切れてないんじゃないですかー。若さ故の青さをまだ引きずっているんじゃないですかー」

俺「気のせいですよー」

＞おじゃほーうｗｗｗ

親父「分かった様な顔で全てを諦めて動くこともせず何処にも行けないのが大人というのならば！お父さんまだ子供でいい！！」

俺「うるせえよ」

「大人になれないやつは置いていきますよー？」

俺「はい是非」

「なんか勘違いしてるようですが、私達アレですよ。受信料取る方の例のアレじゃないですよ」

俺「は？」

「あの、ＮＨＫの方の」

俺「ああー」

カチャリ

「すいませーんカギ閉めないでくださーい」

俺「帰れ」

「いいじゃないですか減るもんじゃなし」

俺「帰れ」

「仕方ないですね。女その3！やっておしまいなさい！」

「任せろ」

カチャカチャ

俺「何やってんだコラ」

「ピッキング」

俺「警察呼ぶぞ」

ガチャン　ガラガラガラ

女3「そうはいかんざき」

女「潜入成功ね！」

俺「マジ帰れ」

女2「なんかごめんね」

親父「なんだなんだお客さんかー？」

女「さあみんな！あれがウワサの壁お父さんよ！！」

女2「うわー本当に壁にめり込んでるーすごーい」

女3「・・・・・ブラーボ！」

やいのやいの

親父「おお、なんか知らんけどお父さんモテモテ？これが噂のモテ期って奴か！息子よ、モテ期だ。お父さんにモテ期が来た！」

俺「そうだな・・・」

女「さあ思う存分保護させてもらうわ！」

女2「ねえねえちょっと引っ張ってみていい～？」

女3「ちょっと遺伝子のサンプルを・・・」

親父「ムハハハ！何か知らんけど好きにしなさい！ムハハイデデデデ！」

俺「茶がうまい」

女「実はまだこの他にもお父さんに会いたいって人を連れてきてるの！家に上げても良いかな？」

親父「ムハハハ！どんと来なさい！モテ期ここに極まれりだな！ムハハハ！」

俺「もう好きにしろ」

女「じゃあ入ってくださーい」

ガラガラガラ

婆「おぉ・・・これが噂に聞く壁の神さんかえ・・・」

爺「本当に壁と一体化してなさる・・・きっと名のある神さんに違えねえだ」

婆2「ありがたやありがたや」

爺2「ありがてぇありがてぇ」

ゾロゾロゾロゾロ

親父「息子よ。お父さんのモテ期終わったわ」

俺「短かったな」

婆3「ありがたやありがたや」ベタベタ

親父「ちょっ別にご利益とかないから顔ベタベタ触らんといて」

爺3「ありがたやありがたや」ベタベタ

親父「ちょっやめっ、何これカブト虫の臭いがする！息子！ちょっとこれ助けて！」

俺「ありがたやありがたや」

親父「えっお前もそっち側なの」

女「はーい並んで並んで、ひと撫で１００円ですよー」

親父「なんか商売始めてる！」

爺４「こいつぁ村の皆にも見せてやらにゃいかんべ！皆手伝ってくんろ！」

婆４「だべだべ」

爺５「ありがてぇありがてぇ」

婆５「ありがてぇありがてぇ」

親父「ちょっ何？何する気？」

爺６「どっこいせ」

メコッ

親父「壁ごとくり抜かれた！恐るべし老人パワー！」

爺６「ありがてぇありがてぇ」

婆７「んじゃ村さ持って帰って寺に奉納するだよ」

爺8「だべだべ」

ゾロゾロ

親父「ちょっ誰か助けて！このままじゃ奉られる！そして崇められてしまう！」

俺「良かったじゃん」

女「村の神と崇められ一気に信者を増やすチャンスね・・・！皆！行くわよ！」

女2&女3「ガッテン！」

爺9「ありがたワッショイありがたワッショイ」

婆12「ありがてぇワッショイ」

親父「早くも、みこしみたいに扱われている・・・」

ワーッショイ！ワーッショイワーッショイ！

ズダダダダ

ガラガラ

俺「・・・・・・」

<・・・・・ワーッショイワーッショイ！

俺「行ったか・・・」

俺「・・・・・」

俺「一人暮らししようかな・・・」

受信料シカトし続けたら怖い人が来たでござるの巻（後書き）

今日の教訓

怖い事になる前に出す物出した方が良いでござる

親父が老人に崇められてるから外人と助けにいった先で業者がひき逃げしたりす

休日

俺「ズズ・・・茶がうまい」

ＴＶ＜イイットモイイットモ♪テレレッテンテレレレ♪

俺「ズズズ・・・・」

・親父はジジババに誘拐されて以来帰ってきてません。

俺「ズズ・・・」

俺「・・・」

ＴＶ＜ソレデハオトモダチショウカイシテクダサ・・・エェー！

俺「毎回毎回ワザとらしいなあ」

俺「ズズ・・・」

俺「あ、ジャンプ買って来たんだ。読も」

ペラ・・・

俺「・・・・・・」

ペラ・・・

俺「・・・・・」

ピンポーーーン！ピンポーーーーン！！

俺「ん・・・？」

ドンドンドン！！

「タノモー！！タノモー！！」

俺「誰だよ・・・」

ガチャリ

外人「タノモーーーーゥ！！！」

俺「うお・・・。お前は確か、えーっと。外人？」

外人「ハンクス！ハンクスデスヨー！パピィの友達の！」

俺「なんだよ。何か用？」

外人「ナンカ用じゃネエヨ！！オマエ何くつろいでんダヨ！！」

俺「えっ？」

外人「オメーの父ちゃんサラワレタでしょうが！ジャパニーズゴールデン玉袋共ニ！」

俺「玉袋とか言うんじゃねーよ。何だそれはシワシワだからか。老害って言え老害って」

外人「ソレモどうナンダヨ！！」

俺「それより何なの。帰ってくんない。あと土足で上がらないでくれない、ここ日本」

外人「ソンナンシルカ！欧米ではヒトンチ足跡まみれにして帰るのが流儀デース！！」

俺「お前てきとうな事言うなよ」

外人「そんなイエローモンキー共のキナクセー文化はどうでもイイカラ！パピィのキューシュッに向かいマスヨ！！」

俺「お前の発言色んな所に敵作るからちょっと黙ってくんない」

外人「ツイテきなボーイ！！マフユのハイウェイをトバスゼヒーッハーッ！！」

俺「何そのテンションめんどい・・・」

＊　＊　＊

山奥　名も無い村

俺「結局来ちまったよ」

外人「ナンデスカー。セマっちくてキタネー所デスねー。イエローモンキー共の器の小ささがウカガエマース」

俺「アンタそんなムカつくキャラだったんだ」

外人「ハッ！テラですよボーイ！寺！！ジャパニーズテッラー！ワタシ大コーフンデース！！」

俺「そういえば爺さん達が親父を寺に置いて崇めるだの何だの言ってたな」

外人「ナールホド！！アソコにパピィがイルンデースネ！！シャラップ！！シズカニ！！コッカラはシズカニネ！」

俺「お前が一番うるさいんだけど」

コソコソ

外人「ボーイ！ココカラ中をノゾケマスヨ！チョット様子を見てミマショー」

俺「どれどれ」

ー寺の中

ハンニャーホンニャーハンニャーホンニャー

爺「ありがてぇ！ありがてぇ！」

親父「やめてぇぇ！お供え物そなえないでぇぇ！！」

婆「ありがてぇ！ありがてぇ！」

親父「やめてぇぇ！手を合わせて拝まないでぇぇ！！」

ハンニャーホンニャーハンニャーホンニャー

ー外

外人「ｏｈ・・・」

俺「・・・何と言ったら言いのか」

外人「スゴイ勢いでアガメラレてマースね」

俺「そうだな・・・」

外人「アノママデハ！パピィがご神体ニ！！ゴシンタイにナッテシマウ！早くタスケないと！」

俺「別に良いんじゃないかなぁ・・・」

外人「イソギますよボーイ！」

俺「あ、はい」

＊　＊　＊

爺達「ありがてぇ！ありがてぇ！」

親父「くっ！！」

婆達「ありがてぇ！ありがてぇ！」

親父「ううっ！」

親父（このままでは、このままでは自分が神か何かになった気分になってしまう・・・！）

爺達「ありがてぇ！ありがてぇ！」

親父（そうなったら・・・！そうなったらなにかとても痛々しい人になる！！）

婆達「ありがてぇ！ありがてぇ！」

親父「クソーーッ！！誰か！！誰か助けてくれーッ！！」

「　ソ　コ　マ　デ　だ　！！　」

爺婆「誰じゃ！」

親父「お、お前は・・・！！」

外人「タスケにキマシタヨ！！パピィ！！」

親父「外人！！」

俺「名前で呼んでやれよ」

親父「あっ、あと息子」

俺「感動薄いなオイ」

親父「お前来ると思ってなくて」

俺「俺も行こうとは思ってなかったよ」

外人「サア！！アクギョウはココマデでスよ！！タマキンフェイス共！！」

俺「だからそういう事言うなって。訴えられても俺責任持てないよ」

爺共「カアーッ！カウボーイかぶれが調子づきよって！良かろう！戦中時のあの恨み！今ここで返してくれるわ！！」

婆共「日本人ナメんじゃねぇぞ鬼畜米兵共ォォ！！」

俺「なんか爺さん方のすげえ根強い恨みに火つけちまった。おい外人、これ大丈夫か」

外人「コエエーーー！！ジャパニーズラストサムライコエエエー！！！！」

俺「なんかダメだこいつ！」

元気な老人達「くたばりゃあああクソガキ共ォォォ！！」

俺「やっべー、くっそー家でジャンプ読んでりゃ良かった」

外人「ハッハー！イワユルあれデスね！シメノソバ！シメノソバデスねー！」

俺「それは四面楚歌の事を言っているのか」

親父「大丈夫だ・・・。こんな事もあろうかと・・・さっき呼んでおいた・・・」

俺「あ？」

外人「誰ヲ？」

ブロロロロロ・・・キキーッ！

爺「誰じゃっ！」

「チャーッス！」

外人&親父&俺「ぎょ・・・業者ッ！！」

業者「すんませっーん前失礼しやーっす」

爺「させるかー！」

ブロロロ・・・・ドンッ

爺「ぎいあー！！！」

婆「ジイさーーん！」

業者「チャーッス。お迎えに上がりましたー」

親父「家まで頼むわ！」

業者「へーイ」

ヒョイ、ドスッ　　↑親父をトラックの荷台に乗せた

俺「頼りになりすぎるだろコイツ」

外人「ハッハー！ニホンの技術力はセカイイチでーッスねー！」

俺「ちょっと違うと思う」

業者「出発シャーッス」

ブロロロロロ・・・

ヒャーーギャーー！！ウワーコッチキター！ギャー！ン？バアサン？バアサーーーンッ！！

ブロロロロロロロロロロ・・・・

外人「フハハハサラバだー！ウメボシフェイス共ー！！」

俺「やめろって」

＊　＊　＊

ブロロロロロロ・・・

俺「あー、何とか村を抜けたな」

親父「あやうく神になりかける所だった・・・」

外人「ハッハー、カンシャしなサーイ。コレガ欧米の経済リョクデース」

俺「いや全然関係ない」

おーーーーい！

俺「ん？」

外人「ダレかオイカケテきてマースね」

俺「爺共まだ諦めてないのか？業者さん、ちょっとスピード・・」

親父「違うっぽいぞ」

女&女2&女3「おーーーーい！」

俺「あー」

俺「業者さん、やっぱスピード上げてー」

女「ちょっ！待ってよーー！！」

俺「うっせー、元はと言えばお前のせいだろうが」

女「ごめんてー！それはごめんてー！」

外人「ハッハー、まあ良いジャナイデスカー！ジャパニーズヤマトナデシコ！ユルしてあげマッショーよ！」

親父「そうだそうだ許せ許せ」

俺「ダメ人間共が」

キキッ

女「あーーー、やっと止まった。ああーどっこいしょあああー！」

俺「コイツ・・・」

女「いやー、おじいちゃん達元気良すぎて、お父さん中々返してくれなくてねーっ！ごめんねー！」

俺「気にするな。だいたい全部お前のせいだけど」

女2「終いには私達も追い出されちゃって、途方に暮れてた所だったんだー」

外人「ハッハー、ソレはサイナンでしたネー」

女「これからはもっと慎重に信者を増やすわ！まずはプロモーションビデオの作成ね！」

女3「動画編集なら任せなさい・・・」

俺「爺さん達なんでこいつら始末しなかったかなー」

親父「まあ終わり良ければ全て良しという事で」

親父&外人&女「はーっはっはっはっはっは」

俺「・・・・・」

ゴスッ！

親父「痛った！！なに？何なの？」

俺「なんとなく」

親父「ええ・・・」

親父が老人に崇められてるから外人と助けにいった先で業者がひき逃げしたりす

老人は日本の宝です。

訴訟はマジ勘弁

異文化国際交流でござるの巻

夕食

親父「ズズ・・・」

俺「・・・・・」

親父「あ、ちょっと醤油取って」

俺「・・・」

外人「はいドウゾ。モグモグ」

親父「サンキュー」

俺「・・・」

外人「イエイエ」

俺「いや、なんでお前居座ってんの」

外人「エッ」

俺「えっ、じゃねーよ。人ん家のメシ勝手に食ってんじゃねーよ。帰れよ」

外人「ハハッ・・・ソウデスヨネ・・・。ドコまでイッても私は他人・・・。私デハ家族の一員にはナレナインデスヨネ・・・。アナ

タの本当のお父さんにはナレナインデスネ・・・」

俺「勝手に人んちの家庭環境を複雑にしようとしてんじゃねーよ」

親父「そんな事ねーよ外人！！お前なら本当のお父さんになれるよおお！！」

俺「お前も流されてんじゃねーよ。本当のお父さんお前だよ」

外人「ワタシニ・・・お父サンにナニがタリナイってイウンデスカ！！ワタシはワタシナリにガンバッテきましたよ！コレイジョウどうしろッテンデスカ！！」

俺「まず部屋の中では靴を脱げ。あとお前お父さんじゃないし」

外人「ガイジンだから！ワタシが外人だからいけないんデスカ！言葉の壁が知ラズ知ラズのうちにフタリのミゾを深めてシマっているデスか！！」

俺「いやあんまり関係ない」

外人「それナラバ・・・それナラバ・・・！！」スクッ

親父「うわー、外人がなにげなくそこに置いてあった地球儀を片手に立ち上がったー」

俺「説明文おつかれ」

外人「国がチガウダケで！！コンナ国境があるセイで！！ワタシとアナタの国との間にこんなオオキナ海があるせいデ！アナタの父親

になれないのナラバ！」

俺「誰がなれと言った」

外人「ワタシは！！クニを！！ステマス！！」ブン！

ガッシャーン！！

親父「そして窓に向かって地球儀を投げたー！」

俺「あの窓もう3回くらいは割ったな。たしか」

外人「・・・ワタシの気持ち、分かってくれまシタか？」

俺「いや全然分からん」

外人「デスヨネ。あっすいませんチョット醤油クダサイ。モグモグ」

親父「はい醤油、モグモグ」

俺「なにこの温度差」

外人「マー、イイじゃないデスか。ソロソロ新キャラでも加えないとマンネリしまスヨ？」

俺「何がだよ」

外人「ソレはマア色々」

親父「そう色々」

俺「なんか腹立つ」

外人「ソンナコトよりウマイっスネー。ジャパニーズミソスープ」

親父「はっはっは。そうだろう、今日は手によりをかけて作ったんだ」

俺「俺がな」

親父「はっはっは」

ズゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・・・

ガタガタガタガタ

俺「おおっ？」

親父「地震だー」

ガタガタガタガタ

外人「ギャーーー！！ナンスカコレ！！ナンスカコレ！！」

俺「落ち着けただの地震だ」

外人「ワタシの国デハ、ソンナン滅多にアリマセーン！！ナニコレ！！シヌノ！私シヌノ！？」

俺「うん死ぬ」

外人「マ、マジデ！！」

親父「結構長いなー」

ガタガタガタガタ

外人「アア・・・きっと世界はモウオワリデース。キット近所の悪魔とかサタンとかが目を覚ましたんデース・・・。キットアレだ。八百屋のオハバンだ・・・。アノ人目つき悪魔ぽかった」

俺「落ち着けただの地震だ。八百屋のおばさんは昔からあんな顔だ」

親父「良い人なんだけどな」

プッツン

外人「アアッ！暗ッ！！目のマエがマックラデース！！八百屋のババアの話をシタカラデース！！魔力で奴に視力を奪われタンデース！！アアー！」

親父「お父さんも何も見えない！！きっと質屋のジジイだ！！ガキの頃ジジイのズラこっそり川に流したからあああ！！」

俺「落ち着けただの停電だ。そして親父は後でジジイに謝ってこい」

外人「ココドコナンデスカ！ナンデワタシ日本語喋レルんデスカアアアアア！！」

俺「いやそれは知らんけど」

カタカタ・・・・・・・・カタ・・・・

俺「終わったかな地震。電気はまだ復活しないな」

親父「真っ暗だ・・・。この部屋も日本の未来も・・・」

外人「ワタシ達の行く道もきっとコンナ風に真っ暗闇デース・・・」

俺「部屋が暗いだけでそんな先の事まで絶望視するなよ。どんだけ打たれ弱いんだよ」

親父「とりあえず明かりが必要だな・・・」

俺「懐中電灯とかあったっけ」

外人「オー、私ろうそくなら持ってマースよ。普通の5倍くらい溶けやすい奴デスけど」

俺「何に使うのかは聞かないでおいてやるわ・・・」

親父「よし点けよう点けよう！色んな疑問が浮かぶ前に！」

ボゥッ

外人「ｏｈ・・・・」

親父「ろうそくの明かりって何か安心するよな・・・」

外人「ワタシ・・・もう少しガンバッテ生きてみようと思いマース・・・」

親父「明かりの向こうに日本の夜明けが見える・・・」

俺「ろうそく凄えなオイ」

外人「明かりがアル限リ・・・人は生キテイケル・・・！」

親父「そうさ・・・！希望がある限り・・・！」

俺「幸せな奴らだ」

ドロドロドロドロ

俺「げ、すげー勢いで溶けてきた。ちょっ、オイどうすんだこれ」

親父「ああ、俺達の希望が崩れていく・・・」

外人「やっぱり今週中に死ニマース・・・」

俺「お前らめんどくせっ」

親父「あーっ！ろうそく倒れる倒れる！」

外人「サセルカアアア！！」

ガッシッベチョ！　↑注）ろうそく掴んだ音

外人「アッツァァァァァァァァァァァァァアア！！！！」

親父「ガイジーーン！！」

外人「アッツアアアアアアアアアアアアアア！！」バタバタ

俺「ちょっろうそく振り回すな！飛び散る！！ロウが！」

外人「アッツウアアアアアアアアアアアアホオオオ！！！」」

親父「ガイジーー・・・」

ベチャ

親父「あっつ！アッツァァァァァァ！！！」

俺「そら見た事か！！」

ベッチャ

俺「あっちい！！ちょ、オイ！」

外人「ホオット！！ホオオオオット！！」

ブンブンブン

ベッチャベッチャ

親父「アッツアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

俺「あっちいいいいいいいいいいい！！！」

ブンブン

ホォォォォアッツゥゥゥゥゥゥゥ！！！

ベッチャベチャ

ロウソクハナセッテ！！ハナセアッチィィィィ

メガ！メガアアアアアアアアアアアア！！

ーーーしばらくお待ちください

外人「ゼェーッ・・・ゼェーッ・・・」

俺「おま・・・いい加減にしろよ・・・・」

親父「前がみえねェ」

外人「スイマセン取り乱しマーシタ・・・」

俺「ていうかさっさと手放せば良かっただろ・・・」

外人「ヤット掴ンダ希望の光のヨウなキガシテ・・・」

俺「お前バカだろ・・・」

親父「前がみえねェ」

カチッ　ブウウウウン

俺「おっ電気点いた・・・」

外人「ヤット復旧シマシタカ。マッタク人サワガセな！」

俺「お前・・・」

親父「顔になんか引っ付いてんだけど・・・」

俺「あーあ・・・部屋ん中ロウソクまみれだよ・・・」

外人「悪趣味デースね」

俺「お前・・・」

親父「顔がロウソクまみれだわ・・・。なにこのプレイ・・・」

俺「俺も服にへばりついて固まってきたな・・・」

外人「ＨＡＨＡＨＡ、親子ロウまみれでお揃いデースねー！ペアルックデスカー！ヒューゥ！」

俺「よし、お前ぶん殴る」

外人「すいません調子こきました」

ガッス！

外人「アァァァァウチ！！」

親父（最後やけに流暢な日本語だったな・・・）

異文化国際交流でござるの巻（後書き）

外人が鬱陶しくなってきた方は感想ください。すぐに消すかあるいはレギュラー化するでござる

ぶち込み詰め合わせのごった煮でござるの巻

題「恋、美人教師、よしこ」

ＴＶ＜恋の美人教師よしこ！はじまるよー！

親父「よったあああん！！よったあああああん俺だよー！！！」

俺「うるさい」

ＴＶ＜暮れーなずむー町の～♪

俺「ＯＰその曲かよ」

親父「よったあああああああああん！！」

俺「うるさい」

ＴＶ＜ひか～りと～影の～中～

親父「よったあああああああああああああ・・・ん？」

俺「これ、土手走ってるの外人じゃね？」

ＴＶ＜さり～ゆく～貴方に～♪　ＨＡＨＡＨＡヨシコセンセーイ

親父「マジだこれ・・・」

俺「何やってんのこいつ」

ＴＶ＜送る～言葉～♪　ウフフフ　ＨＡＨＡＨＡ

俺「よしこ先生と外人抱き合ってるよこれ」

親父「うわあああああああよったあああああああん」

ＴＶ＜「ついに結婚！？さよならよしこ先生！」

俺「結婚だって」

親父「ええええ」

ＴＶ＜「ハンクスさん・・・好き・・・」

俺「相手外人だって」

親父「ええええええ」

＊　＊　＊

題「てるてる坊主」

トンテンカンテン

業者「はい、窓張り替えときやしたー。またのご利用お待ちしておりヤース」

親父「はいはいお疲れさま」

俺「何枚目だろうなこれ」

業者「失礼シャーッス」

ブロロロ・・・

ガッシャアアアアアアアアアアン！！

少女「久しぶりだなうぬら・・・」

親父「また割れたあああああああ！！！！」

俺「最短記録だなこれ」

少女母「あらあらごめんなさいねぇ、ちょうど良い所に窓があったものだから・・・」

親父「それで今日はなんの用で？」

少女母「実は明日この子の遠足があってねぇ。ちゃんと晴れる様にてるてる坊主の量産体勢に入りたいって・・・」

俺「なんでウチに来るんですか」

少女母「それじゃ私は主人と闇の一族との決闘があるのでこれで・・・」

親父「はいはいお気をつけて～」

俺「何者なんだよあの母ちゃんは」

ガラガラガラ

外人「ハナシは聞かせてモラッター！！テルテルＢＯＺナラ私にマカセロ！！」

俺「帰れ」

ピシャン　カチャリ

親父「それで何？てるてる坊主つくるの？」

少女「クックック。実はもう持ってきてある・・・」

ズゴン・・・！

俺「無駄にでけえな」

少女「真球になるまで叩き上げた黒曜石を布でくるんである・・・」

親父「それはそれは見事な打岩でございました・・・」

俺「どこの烈士だよ」

少女「名付けて「手流手流(てるてる)お師匠」！！」

親父「もはや坊主じゃないんだ・・・」

外人「オー、かわいらしいテルテルボーズでーすネー！」

俺「どっから入ったお前」

少女「ククク・・こいつを越えるてるてる坊主を作って見るが良い・・・ウジ坊主共・・・」

親父「酷い言われ様！」

外人「ヨーシ！オジサンが格好良いでっかいホクロを書いてアゲマース！」

キュッキュッ　←黒子書いてる音

少女「あ」

親父「あ」

外人「上出来デース！」

ゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・

少女「・・・・・・」

俺「お前なんでそういう事すんの・・・」

外人「ヨカレとオモッテ・・・」

親父「怒ってるよあれ・・・」

少女「ご苦労だった・・・と言いたいところだが、君らには消えてもらう。

貴様等は知らんだろうが我が１０００年の闘争はここで勝利と言う終焉を迎える。

これから貴様等はなんの手助けも受けず、ただひたすら、死ぬだけだ。

どこまで　もがき苦しむか見せてもらおう。

死ぬがよい。」

外人「」

俺「南無」

ガッシボカズリズリズリブチャゲヌゲモゲチャ

オトウサンナニモシテナウギャーーー

アァァーーーハナガ！ハナガトレマシター！

以下、自主規制

＊　＊　＊

題「星座占い」

ＴＶ＜よしこ先生の星座占い～♪はーじまーるよー！

親父「うわあああああよったん！よったああああああああああああん！！」

俺「落ち着け」

ＴＶ＜よしこ「今日はゲストに、ハンクスさんをお迎えしてま～す♪」

ＴＶ＜外人「ＨＡＨＡＨＡ会いたカッタかいマイハニー」

親父「うおおおおおおおおおおお！！！外人爆発しろおおおおおおお！！！」

俺「だからなんでこいつ出てんの」

ＴＶ＜魚座の方は～今週一週間とってもハッピィな事がつづきまーす♪

＜ＨＡＨＡＨＡヨカッタデスネー

俺「お、ラッキー。親父は何座だっけ」

親父「乙女座」

俺「きもっ」

親父「ひどっ」

ＴＶ＜乙女座の方は～♪・・・うわ、えっコレ・・・。うっわぁ・・・・

ＴＶ＜・・・ちょっと一旦カメラ止めてくだサーイ

親父「えっ何？何なの？」

ＴＶ＜え・・・えっとあのー。あっ。大吉・・・うん、大吉です、乙女座の人、全然大吉です。はい

親父「ウソだ、絶対ウソだ・・・」

俺「良かったな大吉」

ＴＶ＜じゃあ今週はここまで！ま～た来週～♪

親父「何なの！乙女座何だったの！」

俺「葬儀の準備、始めないとな・・・」

親父「えっ俺死ぬの！？」

ぶち込み詰め合わせのごった煮でござるの巻（後書き）

以前貰ったお題を元に書いた奴の三本立て
所謂抱き合わせ商法でござる。

感想・罵倒と一緒にお題くれれば適当に書くでござるの巻

低反発まくらは投げると結構痛いでござるの巻

親父「今日も平和だなー。あー茶がうまい」

俺「ズズ・・・」

ピンポーン

親父「んん？誰だ？」

ギィィィィィィ・・・

吉田「ガ、ガフッ・・・」

バタッ

親父「吉田？吉田ーーーーー！！」

俺「この人生きてたんだ・・・」

吉田「ウウ・・・止められなかった・・・始まってしまった・・・」

親父「何があった吉田！一体何があった！！」

吉田「遂に始まったんです・・・！2丁目と3丁目のオバハン達の血で血を洗う戦争が・・・！ゲフッ」

俺「ええー・・・」

吉田「気をつけて・・・オバハンはこの前布団屋の山田さんが無駄に大量に仕入れた低反発枕で武装してます・・・」

俺「返してやれよ・・・山田さん可哀想だろ・・・」

吉田「そのオバハンが投げた枕が当たってこのザマです・・・ゲフッ」

親父「喋るな！もう喋るな吉田！」

俺「体弱っ」

吉田「奴らは・・・空き地に・・・。いままで貴方といっしょにいれて・・・たのし・・・かっ・・・・」

ガクッ

親父「吉田・・・？吉田あああああああ！！！」

俺（吉田あんな喋る奴だったっけ・・・）

親父「んじゃ空き地行くか」

俺「切り替え速っ」

業者「お迎えにあがりやしたー」　キキッ

俺「仕事速っ」

＊　＊　＊

空き地

ギャーギャー

親父「やってんなー」

オバハン「くらあああ！死にさらせええええ！！」ブンブン

オバハン2「この前セールで私のマフラーぶん取ったのお前やろおお！！」ブンブン

オバハン3「アンタウチの息子の教師に色目つこうてたやろおおお！！キモいんじゃババアアアア！！！」

ナニヲアアアーーー！！？？

俺「なんて醜い争い・・・」

オバハン4「アンタ化粧濃すぎるんじゃあああ！！」ブンブン

オバハン5「アンタこそ、その歯の黒いのなんじゃあああ！！」ブォン！

山田「ああ投げんといて・・・、返しとくれ・・・うちの枕返しと

くれ・・・」

親父「山田さんが一番の被害者だな・・・」

俺「それはもう本当間違いない・・・」

「貴方達、おもしろそうな事やってんじゃないの」

オバハン「何や！誰や！！」

「なんだかんだと言われたら答えてあげるが世のなんだっけまあいいや、とうっ」

シュダッ

母「お母さんでーっす」

キラーン

親父「か・・・母さんかっこいい・・・」

俺「何やってんのアンタ・・・」

母「紛争ある所つねに母の姿あり、よ。息子」

俺「そんな物騒な母親はいねえよ」

オバハン6「あ・・・あの人はまさか・・・！「伝説の主婦」！！」

オバハン7「夏のバーゲンで商品ねこそぎタダ同然まで値引きした後全部持って帰ったという・・・あの！？」

俺「なんて不名誉な伝説・・・」

母「枕投げ・・・修学旅行を思い出すわね・・・貴方」

親父「ああ・・・、母さんがマジで投げた剛速球の枕でクラスメートが次々と永眠しかけたっけ・・・」

俺「こいつらの思い出怖い」

オバハン8「伝説なんて関係あらへん！こいつを喰らいやあああ！！！」ブォン！！

パシリ

母「いいわよ、奈良の惨劇とまで言われた私の剛腕・・・見せてやるわ」

ブゥゥゥゥォオオオオオオオオオン！！！！！！！

オバハン8「えっ」

ズゥッガア！！！！

オバハン8「イギャアア！！」

俺「こえー、奈良の惨劇こえー」

母「オラオラオラオラオラオラオラオラオラ！！！」

ブゥオンブゥオンブゥオンブゥオン！！！！

オバハン達「いぎゃー！」

ズガビシダブシデギャシブ！！

親父「相変わらず美しいフォームだ・・・」

俺「大丈夫かお前・・・」

山田「あれは・・・低反発まくらなんてモンやない。あれぞまさに猛反発まくらや・・・！！」

俺「何言ってんのこの人・・・」

被害者続出で戦争は終わりました。

低反発まくらは投げると結構痛いでござるの巻（後書き）

吉田は次回には生き返ってるでござるの巻

パソコンに風邪うつされたでござるの巻

親父「ズズッ・・・」　←風邪引いた

俺「ズズ・・・」←茶

親父「ケホンケホン・・・あー、辛い」

俺「一日中家に居るのに何で風邪ひくかな。バカのくせに」

親父「病人にも息子が容赦ねえ・・・辛い・・・」

俺「全く何処から貰ってきたんだか・・・」

親父「多分あれだよ・・・。この前お前にパソコン借りただろ」

俺「あー。うん？」

親父「そしたらウィルスに感染しましたって・・・。お父さんもうビックリして・・・」

俺「違うからな。それ人間かかる奴違うからな。パソコン調子悪いと思ったらお前かこの野郎」

親父「恐ろしい所じゃ・・・インタアネッツとは恐ろしい所じゃ・・・。人間が安易に足を踏み入れてはならぬ・・・」

俺「長老かよ」

親父「ズズッ・・・。あー、ハンカチハンカチ」ズズ

俺「なんで柄がミッフィー」

親父「母さんに貰った・・・ッズ」

俺「似合わん・・・」

親父「だめだ。薬飲んで寝よう」

俺「風邪薬あったっけ」

親父「無いから外人に頼んどいた・・・」

俺「あんま期待できない輸入ルートだ」

ガラガラッ　バッターン！

外人「こんにちはデスヨー！！なんかよくわかんないんでお薬っぽいモノ買ってきまシター！」

俺「ほら見ろ」

親父「あ・・・ああ、すまないねえ。あんたにばっかり苦労かけて。いっそアタシぁ・・・」

外人「それは言わない約束デスよお父サーン。お薬デスヨ。ささ、グイっと」

ザラザラザラザラ　　↑無理くり薬飲ます音。ダメ、ゼッタイ。

親父「ムガガガガガガ」

俺「死ぬ死ぬ」

外人「ドウスカお父さん。こんだけ飲めば直るッショ」

俺「むしろ毒だろ」

親父「あ～、なんか元気になっちゃったかも～」

俺「単純な体しやがって」

外人「それはよかったデース」

俺「・・・」

俺（どうでも良いけどあれ多分、鶏のエサだよな）

親父「よかったよかった、あっはっはっは」

俺（言わないでおくか）

パソコンに風邪うつされたでござるの巻（後書き）

今週は
お題「親父が風邪薬と思って飲んだのは家畜用の餌だった」
でお送りしたでござる。
話に無理がある感じがするのは気のせいでござるよ。あるいは作者の力量不足でござるよ。

ネタを提供してくれる方や、作者をいじめたい人など
ガンガンお題募集するので感想やら何やらで送ってださいでござる。

外眺めながら忍者走らせてたら終点だったでござるの巻

俺「・・・・・ズズ」

親父「・・・・・・」

ＴＶ＜魔法中年ツヨシ！この後すぐ！

俺「・・・・ボリボリ」

親父「・・・・・」

ＴＶ＜出たな怪人！魔法パーンチ！！

俺「・・・・・・」

親父「・・・・・息子よ」

俺「・・・・ん」

親父「暇だ・・・・」

俺「そうか」

親父「だいたい壁にめり込んでから、ここ最近。やる事がなくてお父さんとても退屈だ・・・・」

俺「・・・・そうか」

親父「お父さんは考えたよ、壁にめり込みながらでも簡単に出来る趣味、遊びを考えに考え抜いた。それだけに留まらず、
日本壁めり込み委員会から名誉会長をお呼びしてこの命題に対し激論を繰り広げた。最終的にマジでケンカになった」

俺「子供か」

親父「結果ピアノをやる事にした」

俺「いや・・・もっと他にも手軽なの色々あるだろ」

親父「お父さん昔から音楽家に憧れてて・・・、それにもう頼んじゃったし」

俺「えー・・・」

ピンポーンガチャ

業者「チャーッス！お届け物デーッス！！」

ドン！

業者「ありがとうございやしたー！またのご利用お待ちしてヤーッス！」

ガチャッバタン

ブロロロ・・・

俺「嵐かアイツは」

親父「うほほーい、ピアノ来た来た」

俺「なんでまたグランドピアノなんだよ。でけえよ、すげー邪魔だよ」

親父「グランドピアノをテーブル代わりにしてメシ食うのが夢だったんだ・・・」

俺「なにその間違ったオシャレ感覚。コレにみそ汁とか焼き魚乗せて食ったらむしろ台無しだろ」

親父「まあ、なにはともあれさっそく弾いてみよう」

俺「いくらしたんだよこれ・・・」

親父「・・・・・・」グッ

俺「・・・・・・」

親父「・・・・・・」ググッ

俺「・・・・・」

親父「息子よ」

俺「・・・」

親父「手が届かん」

俺「捨てるか・・・」

親父「らまっ！ちょっと待って！」

俺「弾けないなら意味ないだろ、返品するか捨てるぞ」（らま？）

親父「まだ使い道ある！なんとかできるって！えーっと、あのー、そのー」

俺「業者呼ぶか」

親父「あっ、電車乗る時とか、外の風景見ながら妄想上の忍者を走らせたりするだろ？皆やるだろ？」

俺「皆やるかは知らんけど・・・」

親父「あれと同じ要領で、ピアノも妄想上の忍者に弾かせれば良いんだよ！！」

俺「・・・・・」

親父「・・・あー、めっちゃ弾いてる、今めっちゃ忍者ピアノ弾いてるわ。モーツァルト弾いてるわ」

俺「・・・」

親父「あー、美しくも切ない旋律だわ、忍者めっちゃピアノうまいわ。忍者好きになっちゃいそう」

俺「もしもし、さっきのピアノ返品したいんですけど」

ピンポーンガチャ

業者「失礼しやーっスー！」

ヒョイッ

業者「ピアノ回収しやしたー！またのご利用お待ちしておりやすー」

ガチャッバタン

ブロロロロロ・・・・

親父「あああああっ！忍者っ！！待ってくれ忍者ァー！！」

俺「ピアノどうでもいいのかよ」

外眺めながら忍者走らせてたら終点だったでござるの巻（後書き）

今回のお題「忍者」「ピアノ」でお送りしました。
展開が無理やりなのはいつもの事でござる。

あと、魔法中年ツヨシって奴、
実は短篇で書いて上げてあるんで良かったら読んで文句言ってください。
お察しの通り宣伝でござる。

まだお父さんが壁にめり込んでいなかった頃の話

ＴＶ＜アニメ！棒人間ウォーズ！！はじまるぜ！

親父「お、懐かしいなコレ」

俺「あー、再放送かな」

親父「むかーしお前に棒人間レッドのフィギュアが欲しい欲しいってねだられたっけなー」

俺「あー知らん忘れた。記憶を捏造するなよアホ親父」

親父「あの頃はお前もちっこくてかわゆかったのに」

俺「うっせーキモいわ」

親父「昔がなつかしいわー・・・」

モワンモワンモワンモワワワワ　注＊回想する時の音。以下、回想

俺くん少年時代ー

親父（若）「おはよォー！休みだ休み！お父さんと一緒に遊ぼーぜぇぇ！！」

俺（幼）「えー、まだねむいよー」

親父（若）「キャッチボールでもするか！？親と子の心の会話！！王道だな！！ウン！」

俺（幼）「とーちゃんこえが大きい。うるさいー」

親父「それとも何処かに遊びに行くか！息子はどっか行きたいトコあるかー？」

俺「とーちゃんがいないところー」

親父「息子も言う様になったなー！お父さん早くも泣かされそうだぞー」

俺「あ・・・」

ＴＶ＜棒人間ウォーズから新発売！棒人間レッドフィギュア！レッドと一緒に悪の資産家をやっつけよう！

俺（幼）「・・・・・」ジー

親父「んー？どうした息子ー」

ＴＶ＜更に棒人間ベルト付き！ベルトのスイッチを押すとレッドが

思春期特有の微妙な心境の変化を見せるぞ！

親父「なんだ息子ー！コレが欲しいのかー？」

俺「びみょうなしんきょうのへんか・・・・」

親父（そこに食いつくのか・・・）「よーし今日はお父さん奮発してやる！レッド買いにいくかー！」

俺「たまには使えるじゃないごくつぶしのくせにー！」

親父「おお、おうよ。息子どっからそんな言葉覚えてきた」

俺「かーちゃんが言ってたー」

親父「泣けるわー！」

・・・

・・

・

回想おわり

親父「あれ、楽しい思い出のはずなのに何で涙が」

俺「なに言ってんだ」

ＴＶ＜食らえ！棒人間スープレックス！！

親父「ところであのフィギュアまだ持ってんの？」

俺「・・・捨てたし」

まだお父さんが壁にめり込んでいなかった頃の話（後書き）

今回のお題「棒人間」「戦争」

お題消化する時にとりあえずテレビに言わせて楽してんじゃないかとか思った方。

気のせいです。

フィギュアは物置にしまってあるそうです。

部の活動は主に大富豪だったでござるの巻

自宅ー

親父「時に息子よ」

俺「何だ」

親父「いっつも帰ってくるの速いけど、お前部活はやってないのか？」

俺「やってないよ。家で家事もあるし」

親父「バキャロウ！若いもんがそれでどうする！学生といえば部活！部活といえば学生！！汗や血へドその他色々な液体を流しつつ友情を深める素敵活動！それをムゲにするか！」

俺「じゃあメシ作らなくていいのか」

親父「それを言われると痛い」

俺「だろ」

親父「でもやってみたらどうだ。メシの事はお父さんなんとかするから」

俺「考えてみるわ」

＊　＊　＊

学校

友「部活ねえ」

俺「おう、この学校なんか有名なのあったっけ」

友「いやあ、基本的に何やってるかよく分からん学校だし」

俺「だよな」

女「なになに何の話ー！」

俺「出たな変人」

友「こいつが部活入ろうか迷ってんだってさ」

女「そういう事なら私に任せろー！！「部活動宣伝部」部長である
この私にな！！」

友「そんな部活あるんだ・・・」

俺「ますます分からなくなってきた」

女「じゃあ放課後また集合ね！」

ーーという事で放課後

女「まずここがバスケ部よ！！」

友「わーここがバスケ部かー」

俺「なんか展開速くね」

女「見ての通りバスケしてるわ。彼らは」

キュッキュッキュキュッ　ダムダムダム

バスケ部員「ディーフェンスｗｗｗｗｗディーフェンスｗｗｗｗｗｗ」

バスケ部員２「ディーフェンスｗｗｗｗｗディーフェンスｗｗｗｗｗｗｗｗ」

バスケ部員３「ディーフェンスｗｗｗｗディーフェ・・・ディーフェンスｗｗｗｗｗ」

友「なんか暑苦しいね」

俺「おい、ディフェンスの練習しかしてないぞ」

女「守りの固さに関して言えば我がバスケ部は県内一よ！！ディフェンスしかしないから試合では勝った事がないけどね！」

友「だめじゃん。つうかバカじゃん」

俺「次いこう次」

以下ダイジェストでお送りしますー

ー校庭

女「ここが野球部！校庭に雑草が生えるスピードは国内一よ！部員は一年のほとんどを草むしりに費やしているわ！！」

友「だめじゃん。つうか校長なんとかしろよ」

俺「次」

ー陸上部　部室前

女「ここが陸上部よ！校庭は草むしりする野球部員がいて走れないから年中サボってるわ！今は大富豪やってるわね！」

友「だめじゃん。つうか草むしり手伝えよ」

俺「次」

ープール

女「ここが水泳部よ！プールは一般開放されていて誰でも入れるわ！部員はウォータースライダーとか屋台とか作って金取ってるわね！」

友「むしろすげえ」

俺「水泳は全然やってないけどな」

＊＊＊

その後

スタスタ

俺「あれから色々回ってみたはいいけども」

友「ほぼ部活はしてなかったな。うん」

俺「本人達は楽しんではいるんだろう多分」

友「じゃあいいのか。え、いいのか？」

女「さて、着いたわよアンタら」

俺「まだあったのか」

友「もうお腹いっぱいなんですけども」

女「ここが文化系総本部よ！！今回のメーンイベントだわ！」

友「あー、そうすか・・・」

部長「そして私が部長だ！！！」

俺「い、いつの間に」

部長「良くきたな諸君！ここは文科系総本部！！略してエクストリーム文化部だ！！」

友「何も略してねえ！」

俺「なんだか知らんがすごい説得力だ」

部長「その昔！茶道部やら書道部やら図書部やら色々あってややこしくなっちゃったある文化部員が一挙に全部まとめて一つの部活にしちまおうと試みた結果がこのエクストリーム文化部だよ！ゆっくりしていってね！」

友「薄々勘付いてたけどこの学校ひでえな！」

俺「校長が全ての元凶な気もするぜ」

女「私の「部活動宣伝部」もこの部に所属しているわ！」

友「え、どゆ事」

部長「正しくは「エクストリーム文化部　部活動宣伝部門」という事だ！」

俺「ややこしいな。むしろややこしいな」

部長「その他にも購買部門、広報部門、情報部門、科学部門、軍事部門、肥後もっこす部門など、多岐に渡る部門が存在するのだっ！」

友「オイ最後のは何だ、オイ」

部長「そんな事より君ィ！！我が部に入部しないかね！」

俺「え、俺」

部長「分かる！その目を見れば分かるぞ！君は根っからの文科系資質！文化を愛でるしか能のない男！潜在的ネクラ！次期文化部長は君しかいねえええええ！！！」

俺「え、何かすげえ侮辱された気がすんだけど。怒っていいのか。これは怒っていい奴か」

友「たぶん褒めてるんじゃあないのか」

部長「入りたまえ！是非入りたまえ！入らないと君の髪の毛から採取した遺伝情報を紙に刷って学校中の壁紙に張り付けるぞ！」

俺「微妙になんか嫌だなそれ。割とどうでもいいけどなんかいやだな！」

友「文科系だ！文科系いやがらせだ！」

女「流石部長ッス！」

部長「さあどうする！ＤＮＡスッパ抜かれてもいいのか！」

キーンコーンカーンコーン

俺「あ、６時。今日の所はメシ作るんで帰るわ」

部長「何、そいつは至極まともな理由だ止められん！だが私はあきらめんからな！」

俺「え、はい」

友「意外に引き際が良い」

女「さすが部長ッス」

＊　＊　＊

ー自宅

親父「どうだ。部活きまったのか」

俺「なんか奇特なテンションの奴に強引に入部させられかけた」

親父「ふーん。何て部活だ」

俺「たしかエクストリーム文化部とかなんとか・・・」

親父「あ、それお父さんが作ったやつだわ」

俺「え」

おわり

部の活動は主に大富豪だったでござるの巻（後書き）

久々でござる
とりあえず学園モノっぽい事をやってみたかったのでござる
青春したかったのでござる。

忍法ピンとこない略し方の術でござるの巻

ー学校　朝

友「うーす、おはよー」

俺「おうおはよう」

女「おっはよー」

部長「おはよう諸君」

俺「！？」

友「い、いつの間に」

女「あまりにナチュラルな登場で一瞬気が付かなかったが貴方は文科系総本部ことエクストリーム文化部略してエクス文化部の現部長さんじゃないかァーーッ！」

友「説明台詞ありがとう！」

部長「そうとも只今ご紹介に預かったこの私こそが文科系総本部ことエクストリーム文化部略してエリーム部部長のこの私だァーッ！！」

俺「略し方がいまひとつ定着していない」

友「先輩ここ2年の教室ですよ」

部長「何！何の様かって？よくぞ聞いてくれた！そうとも、君！そこの君を我が部に入部させんと馳せ参じた次第だ！！」

俺「いや聞いてないんですけど。え、何ですか、俺ですか。嫌ですよ」

部長「そうかそうか良く言ってくれたァ！では放課後に部室前まで来てくれ！！待ってるから！私ずっと！」

俺「いや何も言ってないんですけど、え、何ですか、嫌ですよ」

部長「じゃあまた放課後会おう！」

俺「やだなにこの人怖い」

部長「バイビ～！」ガララッバタン

女「いっちゃったね」

友「バイビ～って言ってたね」

俺「・・・・・」

友「どうすんの？」

＊　＊　＊

放課後

女「という訳でここがエクストリーム！部室前よ！」

友「わーここがエクストリーム！部室前かー」

部長「よく来たな！」

俺「来ちゃったよ」

部長「ああよく来た！」

俺「とりあえず立ち話も何ですから中入っていいですか」

部長「ダメだ！！」

友「ダメなんだ！」

俺「なぜ」

部長「いやだって特におもしろい物ないし」

俺「ああそうなんだ」

部長「なので今日は学校の各地に散らばるエクストリーム文化部略してエクストリン部、各部門の活動を見て回るという運びにしたいと思う！」

女「エクストリーム文化部略してエクリント部の全容を大体知ってもらう為のはからいですね！流石部長ッス！」

友「気分だな。略し方は気分次第なんだな！」

部長「じゃあ行くぞ野郎共ォォ！！出港だァーッ！！」

＊　＊　＊

和室

部長「えーはいまずここがエクストリーム茶道部です」

女「急にテンションが下がりましたね部長」

部長「えぇはい和室ですから」

俺「律儀だ」

部長「部員達は主にあの、何？あの箒みたいなシャカシャカする奴で、一日中シャカシャカしてます」

友「特に詳しくないぞこの人！大丈夫か！」

女「部長、茶筅です。あれ茶筅って言います」

部長「へェー・・・」

友「特に興味もなさそうだぞこの人！大丈夫か！」

茶道部１「シャカシャカッ！シャカシャカシャカッ！」

茶道部２「シャカッ！シャカシャカッ！」

友「あっ怒ってる！茶道部ちょっと怒ってる！めっちゃシャカシャカしてる！」

女「速すぎて手元が見えないわ！」

茶道部１「シャカッシャカシャカシャカッ！！」

コト・・・。

俺「ズズ・・・。あ、うまい」

女「出したわ！茶を出したわ！！」

友「茶道部だからね！」

＊　＊　＊

パソコン室

部長「次にここがエクストリーム・パソコン部だっ！！！」

女「テンション上がりましたね部長！こらえてたんですね部長！！」

友「りちぎ！！」

ＰＣ部「カタカタカタカタ。・・・。」

部長「ＰＣ部員の活動は主にえー、ハッキ・・・えー何？ああ、そうなの？へーぇ」

部長「秘密だ！！」

俺「すげー気になる！」

女「あのＰＣ部が何かヒソヒソ耳打ちしてたわ！何なの！」

部長「これ以上は言えん！！」

友「教えろ！」

部長「あえて一つだけ言うなら今ネット上に出回っているウィルスの６０％はＰＣ部のお手製だ！！」

友「すげえよ！それだけでもう充分すげえよ！！」

＊　＊　＊

演劇部部室

部長「そして次に！ここが！エクストリーム・演劇部だっ！！」

友「今更だけどなんか展開が前回と同じだよね、延々と部活紹介するっていう」

俺「あーあー聞こえない」

友「えっ」

女「演劇部員の姿が見えませんが部長！どういう事ですか！」

部長「それはな！演劇部は普段、「生徒」の演技を校内で続けているからだ！！実はここへ来るまでの道にも演劇部は数人、生徒に紛れて潜んでいた！！」

女「な、なんだってーーー！！」

俺「てゆうか生徒だしね」

部長「校内に紛れた演劇部員達は何気ない日常会話をしている、様に見えるが！実は全部台本に書いてあるのだ！！全部演技だ！」

友「なにそれなんか怖い！」

女「もしかしたら私の友達のアイツも・・・実は演劇部員・・・？」

友「人間不信になりそう！！」

俺「ごめん・・俺実は演劇部員だったんだ・・・」

友「マジでか！！！」

＊　＊　＊

以下ダイジェスト

衣服部

部長「ここがエクストリーム・衣服部だ！この学校の制服・鞄・靴・校長のヅラ・体操ジャージｅｔｃなどはここで生産まで全部こなす！」

女「どこから金が出てんでしょうね」

俺「校長だろ」

友「アイツやっぱヅラだったんだ！」

俺「毎日髪型違うしね」

吹奏楽部

ドドドンドンドンチャッチャッチャパッパパパラッパーパラパープーギュギュギュイイイイイーン！！

部長「ここがエク＜プオオオオオオオオ♪＞ーム・吹奏楽＜ギャギャギャ＞員達は＜ギャーン！！＞詞作曲プロデ＜ドン！ドドッ！ドドン！＞税生活でウハウハだ！」

友「うっせえええええ」

女「うっせえええええええ」

パッパパーパッパラーッパー！！！！

俺「ルパン〇世のテーマだ」

友「えっ、あ、本当だ・・・」

簿記部部室前

部長「ここがエクストリーム・簿記部部室前だ・・・」

女「なんかただならぬ気配を感じるわ・・・」

部長「この中で行われているのは・・・、会計だ・・・」

友「当然なのに何かすごく怪しい響きだ・・・」

部長「断っておくが！！脱税とかとはまったく関係がない！！インサイダー取引とかもだ！」

友「ですよね！！」

俺「むしろ怪しいよ」

美術部

部長「ここがエクストリーム・美術部だ！我が校のインテリア＆ａｍｐ；エクステリア制服ｅｔｃのデザインから教員共のスタイリストまでここで受け持っている！」

女「流行の発信地よ！いわば渋谷よ！」

友「制服の着こなしが奇抜過ぎて馴染めない！」

書道部

部長「ここがエクストリーム・書道部だ！部員は駅前で字書いて売ってる！」

女「稼いでもいいじゃない人間だもん！」

友「せちがらい！」

科学部

部長「ここがエクストリーム・科学部だ！なんかもうすごく科学だ！」

女「そこかしこで爆発が起こっています！」

友「こわい！」

＊　＊　＊

ーその後、色々まわった後

部長「いやあ、色々回ったなあ」

女「色々まわりましたね」

友「まわったまわった」

俺「便利な言葉だ！」

部長「という事で、我が文科系総本部ことエクストリーム文化部略してE部に！」

友「とうとう略して一文字になったか、めんどくさくなったか」

部長「入部しますね！はい！」

俺「いいえ」

部長「何故だ！実は演劇部だからか！」

俺「あれはうそだ」

友「なんだうそだったのか！」

俺「また騙されたな」

女「まったく気付かなかったわ」

俺「だいたいエクストリーム文化部本部？、というか部長自身はどんな活動してるんですか」

部長「そこに気が付くとはな・・・、流石だ、素晴らしい・・・見込み通りの人材だよ君は・・・」

俺「い、いやあ」

友「照れた！」

部長「そいつが知りたくば、我が部のこれからの活動の中で知っていくことだよ、ゆっくりしていってね！」

俺「いや入ってないし」

部長「もう入部届け出したし」

俺「書いてないし」

部長「そういえば紹介していなかったなエクストリーム・印刷部の存在を！」

俺「な、なんだってー」

部長「彼らにかかれば偽造文書の一枚や二枚なんのその！入部届けは勝手に作って出しといた！」

女「き、きたねぇーッ！流石部長ッ！」

友「犯罪だー！完全犯罪だー！」

部長「そういう訳でよろしく副部長！！」

俺「副部長かあ」

友「乗り気だ！」

おわり

忍法ピンとこない略し方の術でござるの巻（後書き）

茶道部って何してるか謎だよねというお話。

コメント、感想、意見、被害届け、など一言くれればやる気超出ます。3話ぐらい書けます。

忍法料理作れるフリの術でござるの巻

親父「久しぶりのお父さんだよ！」

俺「え、何が」

親父「いやまあ色々」

外人「ひさしブリの外人ですヨ！」

俺「玄関はあっちだよ」

外人「帰れっテかー！、ＡッＨＡッＨＡー」

親父「今日はいつもメシを作ってくれる息子に恩返しするべく！外人による外人メシをご馳走せんと外人を呼んだのだァー！！」

外人「呼ばれたのダァーッ！」

俺「そうなんだ」

親父「外人さん！今夜の献立は！」

外人「今日はワタシの祖国で最もポピュラーな料理でアルお好み焼きを作りマース」

親父「外人は関西人だったんだ！」

外人「ソヤデー。ホンマカナンワァー」

俺「急にエセ関西弁喋り出した」

外人「まずお好み焼きの元になるあのグチョグチョ色々入ってるネバネバした白いヤツを用意しマース」

親父「わあ何それ！」

俺「生地だよ」

外人「その生地がコチラデス」スッ

親父「すぐ出てきた！料理番組みたい！」

俺「どこから出した」

外人「そして醤油いれマス」ドボドボドボドボボボボボ

親父「フタごといったーーーー！！」

俺「えー」

外人「次に鉄板に火を点けて熱しマーす」

親父「醤油の意味はなんだったの先生！」

俺「うちホットプレートとかないよ」

外人「その熱されたホットプレートがコチラデース」スッ

親父「流石用意がいいね！」

俺「どこから出たの」

外人「そして醤油いっちゃいます」ドボドボドボボボボ

親父「何で！！？」

俺「醤油ジュワジュワいってる」

親父「立ち昇る醤油のスメル・・・」

ジュワワワワワァ・・・

俺「なんでこういう事するの」

外人「だって醤油良い匂いジャン・・・」

俺「ッ！だったら醤油の入った風呂にでも入ってろよッ！！！」

外人「エェーキレるポイントそこなノ？怖イ。最近のコ分からヘン」

親父「これからどうするの先生！」

外人「エエとデスね。さっきの生地をホットプレートにドーーーーン！！」

親父「いったーーーー！！」

ジャワワワーン

外人「完成デス！！」

俺「なにが」

外人「ナニガってお好み焼きデスよ」

親父「ドス黒い何かにしか見えません先生・・・」

外人「だってお好み焼きデショ！！お好みで何入れたって良いッショ別ニ！！！」

俺「限度があるよね」

シュワワワワ・・・・（立ち昇る醤油の香り

俺「どうすんのこれ」

親父「・・・・・・」

外人「・・・・・・」

俺「・・・・・・」

プルルル・・・プルルル・・・

親父「もしもし業者さんですか」

ブロロロロッガチャッ

業者「チワーッス！晩ご飯お持ちしやしたーッ！！」

三人「「「いっただっきまーーーッす！！」」」

ばんごはん、みんなで作るとおいしいネ！

おわり

忍法料理作れるフリの術でござるの巻（後書き）

お好み醤油焼きは責任持って外人が全部食わされました。

言いたい事ある方、コメントお待ちしております。

親父が壁にめり込んでからの一ヶ月が過ぎ去りました

ガララッ

俺「ただいまー」

俺「ん？ただいまー！」

俺「親父ー？」

スタスタスタ

俺「・・・いない？」

俺「なんだこの穴」

ヒュウウウウ・・・

俺「親父がめり込んでたのはこの穴か・・？」

俺「・・・中、どうなってんだ？」

俺「・・・親父ー？」

ズオオオオオオオオオオ！！

俺「おっ！？」

俺「なんだこれ、吸い込まれ・・・・！！」

俺「うあっ・・！やばい・・！引き込まれる！」

俺「ぐ・・・！ぐぐ・・・・！」

俺「・・・まあいいか入ってみよ」

俺「あ、そーれい」

シュルルルルルル

スポンッ

＊　＊　＊

ー穴の中

ヒュウウ・・・ドテッ

俺「いてて」

俺「なんだここは」

俺「なんか洞窟みたいになってんな」

俺「うちの家の壁こんなに厚かったっけ。どうなってんだ」

俺「あれ、入り口が見えない。どうやって帰るんだ」

俺「・・・・・」

俺「これは欠陥住宅じゃねーのか！」

俺「後で大家に文句いってやろう」

＜フンフンフーン♪アフォナホウニョハーン♪

俺「ん？」

外人「ア！息子サンじゃありませんカ！奇遇デスね！」

俺「何やってんだこんな所で」

外人「貴方の家でタダメシ食わせてもらおうトやってきたのデスが、変な穴に吸い込まれまーシテ」

俺「まあ自業自得かなあ」

外人「かれこれ2時間はサマヨってたんで、泣キソウになってた所でしたヨー！」

俺「変な歌歌ってたけど」

外人「ここで会ったのも何かの縁！共ニここを脱出シヨウじゃアリマセンカ！」

俺「まあいいけど。あんたもう俺んち来るなよ」

外人「ＨＡＨＡＨＡ！ゴジョウダンヲー」

俺「結構本気なんだけど」

外人「ソレにしてもなんなのデショウねここは」

俺「分からん。俺も入ってきたばっかりだし」

外人「というコトは私はオナジ所をグルグル回ってイタと言うことデースか！アッハッハ！」

俺「割と笑い事じゃないんだけど」

ヒュウウウウウ

俺「風が流れてるな。この方向に進めばどっかに着くんじゃね？」

外人「アッタマＥ！ジャ、いってみましょうカ！」

＊　＊　＊

俺「どこにも着かねえ・・・」

外人「小一時間バカシ歩キ続ケテマスネ・・・」

俺「そろそろ何かあってもいいんじゃないのか、展開的に」

外人「何かオカシナコト言ってマスヨ。ダイジョウブデスカ」

俺「さすがにそろそろ疲れてきたな・・・」

外人「デスネ」

俺「・・・」

外人「・・・・」

外人「オヤ？」

俺「どした」

外人「ナンカ奥の方から人のケハイがシマスヨ！」

俺「なに」

外人「具体的に言ウト中年男性の加齢臭ッポイ臭いガシマス！」

俺「嘘ォ、全然臭わん」

外人「ワタシ外人ナンデ鼻デカいんデス。ダカラ」

俺「なんか怒られそうだからそれ以上言うな」

外人「トニカク進んでミマショウ！」

スタッスタッスタッ

俺「おっ」

親父「よー、何してんだお前ら」

外人「なんだパピィじゃナイデスカー」

俺「なんかすんなり出てきちゃったけど親父こそなにしてたの」

親父「いやー、この穴もそろそろ埋めようかと思ってなー」

俺「あんたが掘ったのかこれ」

親父「おれが掘ったっていうか、うーん。実はお父さんは壁にめり込んだ拍子に時空にひずみが生まれてダンジョンが出来てしまう体質なんだよ」

俺「なにそのてきとうな設定！」

外人「最終回にシテ衝撃の新事実デース！」

親父「ほっておくと色々まあマズいから今まで壁にめり込んでいたんだ。あの、ダンジョンが魔界とかに繋がっちゃうから。うん実は

そうなんだよ」

俺「完全に今作った設定じゃん、むりくり風呂敷たたんでんじゃん」

外人「広げなくテ良い風呂敷広げてソッコーでタタンでる感ジがシマスネ！」

俺「そもそもなんでめり込むんだよ」

親父「そして実はこの穴が魔界への門です」

ヒュオオオオ

俺「さっきから風の音してたのこいつかー」

外人「意外とチンマイんデスネー！排水口グライシカナイシ！」

親父「いやーこれがほっとくと段々大きくなってね。そうなるとあんまりよろしくない結果になる」

俺「悪魔がでてきて世界が滅亡するとか？」

親父「いやこの穴からＣＯ２が流れてきて地球温暖化が進む」

外人「地味ダケド確実な環境ハカイデスネー！」

俺「確かにダメだけど・・・そんなにダメでもないな・・・。いやダメなんだけど」

親父「ということで何かで塞がないといけないんだが、あいにくお

父さん何ももってきてないんだよね」

俺「わりとシリアスな問題なのに計画性ねえなー」

親父「という事でお前らなんか持ってない？」

外人「ワタシは手ぶらデース」

俺「ケータイぐらいしかないけど」

親父「よし！じゃあそれをこの穴に投げ込め」

俺「えー、やだな。買い換えるのメンドいし」

親父「地球のピンチなのにゆるいなー」

俺「ていうかケータイぐらいで塞がれるなよ魔界の門」

外人「万策ツキマーシタネ！」

親父「うーん・・・ん？」

外人「ドウシマシタ？」

親父「外人・・・お前鼻デカいなぁ」

外人「パピィ。ソレハモウ一歩で人種サベツデスヨー」

親父「いや、お前のその鼻とってこの穴に入れたら魔界の門根詰まり起こさねーかなと思って」

外人「エエ・・・何イッテルンデスかアナタ」

俺「そうだそうだ鼻とれよ外人」

外人「エー・・・ナニコノ親子コワイ」

親父「・・・外人、ごめん！」

ブチッ！

外人「UWAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!!!」

親父「さあ息子！こいつを早く穴の中へ！」

俺「なぜ俺に渡す！うわっ！ばっちい！」

親父「さあ早く！外人の犠牲をムゲにする気か！」

外人「チョwwwwハナガwwwwトレタwwwwナニシテハルンデスカwwwww」

俺「くっそー、外人、お前の事は忘れないぞ。さらばだ！」

外人「シンデナイカラwwww鼻が本体ジャナイカラwwwwww」

俺「そーれい」

ポイッ

ズゴゴゴゴオオオオズゴッズゴッゴッゴッ・・・

シュウウ・・・・ウウウ・・・・・・ウ・・・・・・

・・・・

親父「穴が・・・ふさがった・・・」

俺「これでいいのか魔界の門」

外人「鼻ｗｗｗｗｗ私ノ鼻ｗｗｗｗｗ」

親父「さて脱出するぞー。出口こっちだから」

俺「晩メシまだだったしなー」

外人「私ノ鼻世界スクッタｗｗｗｗｗｗｗｗｗ」

＊　＊　＊

自宅ー

スポンッ

スタッ

親父「家にとうーちゃく！」

俺「ちょっとした冒険だったなー」

外人「鼻・・・・私のアイデンティティ・・・・」

シュウウ・・・

俺「めり込んでた穴がなくなっていくぞ」

親父「魔界の門が塞がれたことにより時空がひずみは安定し消滅したのじゃ・・・・」

俺「格好良く言ってるけど塞いでるのはデカッ鼻だけどな」

外人「そんな私も今ジャ鼻ナシデース・・・・」

親父「そう落ち込むなよまた買ってやるから」

外人「エーッ、ホントデスカー？ヤクソクですヨー！」

俺「お前の鼻取り替え式なんだ」

親父「じゃあまあとりあえず晩ご飯にするかー」

俺「久々に親父が作れよ。もう五体満足なんだから」

親父「おー、久々にやってみるか」

外人「パピィの手料理デスカー。楽しみデスネー」

親父「割とうまいぞー、母さん料理できなかったからなー」

俺「あー、やれやれこれでやっと楽できるな」

親父「今までごくろうさん」

俺「うるせーや」

＊　＊　＊

数日後

ガラガラッ

俺「ただいまー」

俺「ん？ただいまー！」

俺「親父ー？」

スタスタスタ

ゴスッ

俺&親父「あてっ」

ドテッ

俺「・・・・・・・」

親父「・・・・・・・」

俺「・・・・・・・」

親父「・・・・・・・」

俺「・・・・・・・」

親父「・・・・・・・」

俺「・・・・・・何してんの」

親父「今度は床にめり込んじゃって。てへっ」

俺「えー・・・・」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

親父が壁にめり込んでから一ヶ月が過ぎました　　おわり

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

親父が壁にめり込んでからの一ヶ月が過ぎ去りました（後書き）

とりあえずこれで、親父が壁にめり込んでから一ヶ月が過ぎました。
完結です。

今まで読んでくださった方ありがとごじます。
感想とかくれると嬉しいです

またなんか書きたくなったらフラッと再開させたりするかもしれないです。多分

あとは特に書くことないです。ありがとうございました。

でぇあ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5472q/

親父が壁にめり込んでから一ヶ月が過ぎました

2011年6月13日07時11分発行